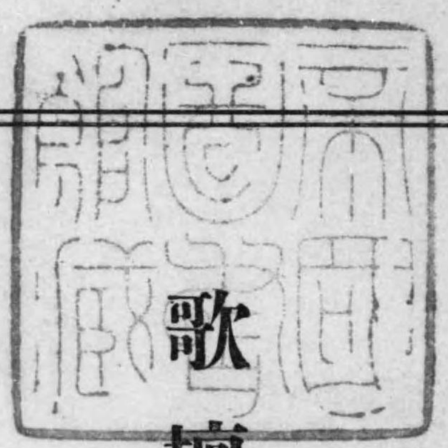
歌壇風聞記

特231
967

始

特231
967



歌壇風聞記

はしがき

明治の中葉、『文壇笑魔經』が爆彈のやうに投ぜられ、文壇騷然。歌壇またセンセーションを捲き起して、長く話題の中心となつた。

歌壇も、その頃から見ると、さすがに三十餘年の時日を經てゐるだけに、多岐多樣、本質の上から、形態の上から、驚くべき變化を見て來てゐる。

中でも結社組織の成立、政黨化、それにつれて、各個人としても著しく政客化の傾向が見られ、制作に專念沒頭するといふ以外に、政治的な裏面活躍、賣名運動等等につれて、排他獨善的な言行が露骨になつて、實に華々しく眼ざましい狀景が展開されたと謂はれてゐるのは衆知の通りである。

從つて、その間に傳へられたゴシップの短篇、長篇の數も夥しいものがある。だがそれらの多くは新聞や雜誌によつて、時々發表せられては來たが、その新聞雜誌の多くが、歌壇結社の庇護の下に辛うじて、發行を續けて居るために、それらの結

社の御機嫌を損ずる事に依つて經濟的に及ぼして來る影響をおそれて、ネタをそのままにぎりツブしてゐるものもあり、または、側近二三四子にだけしか知られずにしまつた、いはゆる特ダネも數多くあるのを拾ひ集めて、ここに一册にまとめて見た。取りあへずこれだけがその初編である。

勿論、まだどこへも出たことのない、とり置きの珍ダネ、妙ダネ、快ダネ、憤ダネ、微苦笑ダネは尙澤山あるが、これを手はじめに、引きつづいて、追々續篇、續々篇と、あとからあとから、御目にブラ下げる要意を持つてゐることを吹聽して、はしがきにかへると、しかいふものは、退屈堂の主人なり。

昭和十二年葉月、皇軍の武運長久を祈りつつ。

歌壇風聞記目次

文化勳章、それから……一
龍頭蛇尾……四
毒舌家……五
讀まれなかつた弔辭……七
歌卷煙草發賣廣告……八
寄人拜辭の理由……九
『明星』の複製……一〇
ささやかな歌碑……一一
鎭靜劑……一二
朗詠……一三
表紙で來い！……一三
面白き噂……一四
一人でいらつしやい……一五
文明のスキ燒……一七
僕を知らないか……一七
御要心……一八
結社商賣……一九
風呂に入れる……二〇
『獨り歌へる』の原稿……二一
反對者……二三
善麿の才と歌と經濟學……二三
東聲のみれん……二六
啄木化けて出ろ……二七
聞いたまま……二九

態度一變……三〇
新刊紹介……三一
順、憲吉、篤二郎、英一……三三
信女は餌まで赤い……三四
名古屋の生んだ女性歌人……三五
御無理御最も……三六
賣物……三七
肩書……三九
『アララギ』はどうなる……四〇
『水甕』はどうなる……四三
『心の花』はどうなる……四六
『國民文學』はどうなる……四九
よそのこと……五一
座禪の講習會……五二
佐渡の殿樣……五三
歌人動物園……五四
似たもの夫婦……五五
役德ゴ兩人……五六
北原白秋とラッパ節……五七
短歌新聞と歌壇新報……五九
自第一號至第八號……六二
山椒太夫の望遠鏡……六三
風呂の中……六五
記事檢閲係……六五
親子・夫婦・兄弟……六六
自費出版歌集の末路……六八
大臣病患者……七一
短詩界一覽表……七二
記念品を贈呈するの會……七二
門人募集……七五
これでも會員……七五
系統・結社轉々調……七六
小栗風葉と和歌……七七
歌壇毒舌家番附……七八
社友搜奪……七九
やぶにらみ・ざつしのすりだか……七九
損が立つ……八〇
不遇の渡邊光風……八四
薫園と葩夕、空穗と清美……八四
三木露風の岐阜時代……八五
廣告料で敵討……八六
短歌の頁……八七
女ならでは……八九
狂言『轉向』……九二
無事なわけ……九七
テンプラ會員……九八
歌壇今昔僞名變名匿名改名番附……九九
議長さん……一〇〇
名古屋の誇り……一〇一
雲隙後白涙……一〇三
商賣の方が道樂……一〇
うらおもて……一一
會計報告……一一三
綽名競いろは歌留多……一一四

畢

文化勳章、それから

文化勳章が制定され、第一回に文壇からは幸田露伴と佐佐木信綱がその選に當つたので、歌壇は、佐佐木信綱にあらゆる方法の下に賀辭を捧げた。

困つたのは釋迢空であらう。

歌人協會の改組に當り、會長選任が云々された時、

「われわれの歌壇は、佐佐木信綱に依つて何等の寄與をも受けてゐない、佐佐木信綱に歌壇的功勞と目すべき点がない。」

と、その會長就任に反對した。

ところが、今日、その功績が認められて、叙勳の御沙汰を拜し、歌壇擧つて祝福してゐるのだから、迢空の面目は完全につぶれたが、そこで迢空は、

「叙勳は學者、主として萬葉集の研究の功に對してではあつて、その歌よみとしてのそれに對してではない。」

と重ねていひ相である。すると今度は、「萬葉研究の功に據る」となると、一方に「一も萬葉、二も萬葉、三も萬葉」と萬葉でなければ夜も日も明けないといふ『アララギ』の面目が連想されて來る。

そして、この迢空がまた、萬葉學者であり、且つは『アララギ』に屬して、その學問的根據となつてゐたことのあるのが想ひ出されても來れば、たとへば、子規に依つて萬葉への復古が提唱され、信綱なごは、その最も排擊された新古今系統に屬するものとして、輕蔑されてゐたことにも、連想は自然につながつて行く。

すなはち、信綱の萬葉研究の功が認められての表彰であるとすれば、萬葉一天張の子規の系統をひく『アララギ』そしてそれに屬して、その學問方面を担當してゐた迢空が輕蔑しようとする信綱が『アララギ』の御家の專賣品かの如き觀を呈してゐた萬葉で叙勳されたといふのに皮肉がある。

『アララギ』の面目玉といふよりも、迢空の面目玉を如何にせむといふことになりはしないか。

帝國美術院がゴタついて、ツブれたともなくツブされたともなく、取り止めになつて了つて、新にその他の部門をまで取り入れた藝術院が作られた。そして今日、文學、書道、能樂、洋樂、雅樂の方面の人選が發表された。その中に、歌壇人の名が二名あげられてゐる。曰く、佐佐木信綱、尾上柴舟。

尾上柴舟は書道の方面からになつてゐる處から見れば、歌人としては信綱一人といふことになる。俳人からは虚子一人が擧げられてゐる處から考へれば、信綱は學

者としてではなく、歌人として加へられたに違ひない。考へて見るまでもなく、學者は藝術家の中へは入れられぬわけであり、信綱も學者としては、學士院會員に擧げられてゐる筈だ。

若し果して、歌人として信綱が加へられたものとすれば、「歌壇には何の功績もない、」と斥けた迢空の面目は、いよいよ丸ツブレといふ譯である。

するとまた、その後追加されて、歌壇關係では、新に齋藤茂吉が加へられた。

茂吉はまつたくヒロひものをしたわけである。もう十年、イヤ五年この成立が後れたら、茂吉なごは問題にならなかつた筈だからである。『アララギ』の下り阪、流行の波に乘つて、可なり目立つたアバレ方をしただけに、先が見えたとなれば、ダダ下りに人氣も衰へ、氣力も乏しくなる譯だからである。

茂吉が入るとなると、北原白秋をごうするといふ聲がするのは當然である。茂吉の藝術家として存在に疑問を持つ者はあつても、白秋のそれにはだあれも疑ひを挾むものはあるまいからである。

ウンのいい者は、ごこまでも惠まれるものだといふ事が、いよいよ信ぜられて來るやうな氣がするわけである。

その反對のウンの悪いものの惠まれ難いことも。（昭和十二年）

龍頭蛇尾

日本歌人協會が大日本歌人協會に改組した時には、柳田新太郎も一寸男を上げた樣だつた。殊に、釋迢空に辭職勸告をつきつけたのはたしかにヒットだつた。

ところがアトがいけない。

改組が改組でなくなり、歌人協會ももとのままなり、釋迢空も元のままだ。柳田も柳田で、ノホホンと會員の席末を汚してゐる。そして殘つたのは、理事といふ有力な發言權、云ひかへれば、横車參與權を失つたに止る。

最も今でもたえず、ボソボソと何かを云つてゐるやうだが、その聲音は頗るヨワヨワしく力がない。フフンと鼻であしらはれて了つてゐる。

スツカリ子供扱ひを受けながら、手も足も出ないといふみじめな恰好を見せつけて了つた。といふのも、或事件云云で蒼くなり、人の力をかつて泣きを入れて了つたのが、内兜を見すかされる事になつたわけで、イケなかつたのだ。それといふのも、公器公器を高唱しながら、正面からごこまでも筆陣を張る事が出來ないほど、歌壇各社の庇獲を仰がねばならぬ『短歌新聞』であるからだ。

公器なら公器らしく、全然各社の助力を仰ぎ奉らないで、堂々と筆陣を張り、ごこまでも辛辣に非を論ずべきである。それだけの覺悟がなくて、顏色ばかりを伺はねばならぬ樣では、たまに正論をふりかざしても、馬鹿にされるばかりで、歌壇の居候の域を脱する機會は永遠に來るものではない。

先づ身目ら歌人協會を脱せよ。歌壇の後援を謝絶せよ。思ふ存分に書きまくれ。そして本當の木鐸となれ。後援は求めずとも、彼等は今度は、心から、つき從つて來るだらう。

今からでもおそくはない。一日も早くこの龍頭蛇尾の嘲笑に反撥する工風をせよ。（昭和十二年）

毒舌家

エゲツない毒舌を弄したり、口ギタない泥試合を常習にしてゐて、ごんな獰猛な人種から思へるものの中には、案外氣の弱い、正直ものが多いから不思議である。

茂吉然り、水穗然り、比露思然り、篤二郎然り。

ところが、これ皆、至つて氣のいい、好々爺揃ひだから愉快なのである。

篤二郎だけはさうでもあるまいが、茂吉にしても、水穗にしても、比露思にしても、初對面のものには、取つく島もない程、言葉すくなで、こつちから話題を提供

しない限り、無言の睨み合ひを續けなければならないのだから、何人しも驚くわけである。

蓋し、（これは篤二郎の口癖である）その氣の弱さを蔽ひかくすためにするカモフラージュで、その毒舌はあるわけである。

ナゼ歌壇といふ處は、おとなしくしてゐては、ごこまでも馬鹿にせられるかわからない奇妙な世界なのだらう。

コケおどしのきく世界、大きく出なければ認められない世界といふことにもなるわけである。

處が會ひに行く者は、ごちらかと云へば、後輩であり、ファンである場合が多いが故に、余計にものやさしく應對するといふ点もあるかも知れないが、恐らくそのやさしいのが本當の彼氏らなのである。

それでは同輩にならば、筆舌する處のごとく、大言壯語するかごうかといふことは、同輩でない者の知る處にあらず焉、といふより外はない。恐らく（コノ恐らくはオソラク有要であらう）後輩に對するのと、やや趣を異にする程度で、「さうぢやないか、なアオイ」（これは水穂の口吻である）位のことはいふのでもあらう。

（昭和十二年）

讀まれなかつた弔辭

石井直三郎が死んだので、日本歌人協會では、制規に據つて金三十圓の香奠と弔辭とを届けて來た。

お使番として宇都野研と矢代東村とが乘り込んで來た筈だつたが、葬儀式場では、とうごう歌人協會の弔辭は讀まれずに了つたので、をかしいと思つて聞いて見ると、

「昨夜は蒲郡に泊つた相で、今朝ゴツタ返してゐる宅の方へ來て、弔辭と香奠とを置いて行つた。」

といふ。これが日本歌人協會の會員死去に對する禮儀だつたのである。

葬儀の式場に列しないのなら、わざわざ旅費をかけて二人も出掛けて來なくつても、郵便で間に合へば、名古屋在住の會員に代理させてもよかつた筈だ。

それにしても、蒲郡の旅館に拂つた宿泊料二人分も、協會の會計から支出されたものだらうか……。

今でも名古屋のウタヨミ仲間は、歌人協會のお役人を羨んでゐる。（昭和十一年）

歌卷煙草發賣廣告

山鳩堂主人

晶子卷　與謝野合名會社の製造で精巧な事日本第一です、香氣芳烈云ふべからざる妙味を有して他店の模造を許さない、今回博覽會でも名譽金牌を得ました、需用家は星菫黨を第一としハイカラー紳士、洋行歸りの學者等で價額も別して高く一本五拾錢ですから中々よく賣れます。

柴舟卷　尾上商會の製品で冷香清味一喫して胸が透く位ゐです、哲學宗教などの冥想家のポケットにはいつも本品を見ない時はありません、續々御愛喫を願ひます定價は十本入一函拾錢です、夏と秋とは本品に限りますよ。

薫園卷　金子商店發賣で風味ヤンワリとしたところ一種愛すべき芳香がありまず、小學教員や中學生が第一のお得意ですが晶子卷の愛用者には不向です。体裁優美進物にはもつてこいです、代價は柴舟卷と同一で都鄙至る處にあります。

空穗卷　近來原料欠乏の爲め品拂底の感があります。本品の特色は一見粗雜ですが地味の芳氣を失はない爲め一時柴舟卷や薫園卷を凌駕しました、然し製造元が株式熱で失敗してから大に顧客を失ひました、十本入八錢で商人又は實業家に愛用されてゐます、窪田商店の製造です。

光風卷　渡邊商會の製造で風味やゝ辛き感があるのは欠点です、殊にコツコツと硬き筋のあるのは他品を吸ひなれた口には吸心地がよくありません、然し價の廉なる爲め愛用者は割合に多くありますが一番儲からないのには閉口しました、博覽會でも褒狀だけとはあまり可哀相です。

信綱卷　佐佐木商店の製品で香味淡白やゝ甘味があるので老人や貴婦人間は勿論のみ馴れぬ人でも一口吸へば小首傾ける價値があります、然し好煙家は一般香氣稀薄として嫌ひます、佐佐木商店は代々これに依つて今日の分限になつたのですから、利益の点では本品が第一です二十本入六錢で何處の小賣店にでもあります。

（明治四十年「山鳩」所載）

寄人拜辭の理由

佐佐木信綱が御歌所の寄人を拜辭した時の理由には、「明治大帝の御集編纂事業が完成したから」といふ事になつてゐて、歌壇は均しくその朗らかな心意義を讃嘆したのである。

ところが、あのやうに憧れてゐた榮職を、あまりに淡泊に退いたのには何かもつと大きな理由がといふ舊派畑の人々の、自己の心持から推しての疑問から、いろい

ろ調べて見ると、何がさて、御殿女中のやうな偏狭さと、猫のやうな執拗さで、殿上人意識充満の他の先任寄人達のために、ごうにも居たたまらず、逃げ出したとも追ひ出されたもわからない狀態で、拜辭したものであることがわかり、それらの舊派の連中は、快哉を叫んだり、自分達の先輩の舊態依然たるヤヤコしい心理狀態に、おのづから襟筋の寒うなるのを覺えたといふことでした。（昭和十年）

『明星』の複製

東京の雄松堂とやら、書物展望社とやらが、例の齋藤昌三、久松潛一の解說付といふ鳴物入りでもあるまいが、第一期『明星』の一部分の複製の豫約募集を堂々と發表した。ところが不用意にも本家本元の與謝野大人に一應の相談も無く發表した處、大人曰く「あの時代のものを小生、生存中複製等して出すことは耻かしく同意致し兼候……」と來て驚いたのは御定連、豆鐵砲を喰つた鳩の如しと。（昭和八年「歌壇風景」所載）

ささやかな歌碑

ともかくも牧水の歌碑が名古屋にも一つ出來た、牧水とは生前、何かと噂のあつた某まで出ての大提灯は、せめてものことだ。列席した喜志子夫人の胸中や如何だとは、某の放送。

この歌碑の主唱者鷲野飛燕は見た通りの好人物だけに、おもしろい話題を投げてゐる。それは名古屋から發行されてゐる『森蔭』といふささやかな歌の雜誌がある。誌上でその竣功を報じたのか又は人に語つたのか、ささやかな歌碑といつたのが飛燕の御機嫌を損じ、ささやかとは何だといふことになつたさうだ。某曰く、イクラ飛燕のポケット大なりと雖もあの歌碑はポケットには入る由もなし、さすれさばさやかにあらず大歌碑也と。

森蔭子、大歌碑の竣功と訂正するの愛嬌ありや。（昭和十一年）

鎮靜劑

エゲツない泥仕合をやらかす齋藤茂吉、あれで本當は至極の小心者だといふから

不思議である。

東大醫學部を出るか出ないかといふ頃、今でも時折は「幼な妻」といふ位だから、その頃はまだおそらく、女學校、それも下級か、然らずんば尋常小學校の上級位だつたらうから無理もない。青春の血に燃ゆる茂吉先生、一夕コワゴワ同輩に連れられて吉原へ繰り込んだ。ところが殘念なことには、要領よく結論を完成することが出來ず、スゴスゴと退却。數日の後、今度は余程の確信を得たと見えて、單獨で意氣揚々と登樓。勿論襲きの夜と同じ家ではない。その後彼曰く、

「成績かい、無論上々吉さ。……實はね、君。鎭靜劑を持つて行つたのサ。」

處方がききたければ、直接齋藤茂吉に問ひ合はされたし。だが、秘方をさうやすやすと傳授して呉れるかごうか。（明治四十三年）

朗詠

大正三年、東京女子高等師範學校に入學した女學生で、貴女があつたら、寄宿舍におちついた、その夜、自修時間も終つて、寢床を敷かうとせられた時、貴女はきつと、出しぬけに、氣狂ひ染みた聲で、

ほととぎす治承壽永の御國母三十にして經讀ます寺

とか何とか怒鳴つてゐる聲を御聞きになつたに違ひはありませぬ。

貴女の上級生の中に、今の水町京子、その頃の安永みち子が居つた筈ですからナ。（昭和十二年）

表紙で來い！

尨大な册子を歌壇におくつて何時もチンビラ雜誌のドギモを拔く名古屋の水甕社、御大石井直三郎の追悼號を發行して遺憾なく水甕王國の貫錄を示した。

某月某日、名古屋短歌會の自稱大先生の面々、この尨大な『水甕』石井直三郎追悼號を圍んで恐れ入つたものの如く溜息をついて曰く、現在の名古屋短歌會では、いくら義憤を感じ一年かかつてもこの半分の册子すら覺束ないと、ものの哀れを感ずる樣なシーン、彼等は更に嘆じて曰く、我々のうち誰れが早く死ぬかといふ樣なことは豫斷は出來ないが、所謂追悼號丈はそれぞれ出すことに一決、申すまでも無くこの『水甕』程の册子は夢にもおもはないが、せめて追悼號の表紙丈は現畫壇の三流ごころに願ひたい、內容は問題で無いが、「表紙で來い！」といふ方針、その準備といふ譯ではあるまいが、殊に最近の『短歌』が內容の伴はぬ表紙のみに身分不相應なチカラコブを入れてゐる所以は此處にあるのださうな。（昭和十二年）

面白き噂

窪田空穂と水野葉舟とが、この頃揃つて美顔術を受けに出かけたさうだ。美顔術は今や若い文藝家の流行となつてゐる。歌人でも特にBなごは先づ第一にこの施術を受けたがいいだらう。Bがこの頃空穂の許を訪れた時、Bが辭し去つてから。空穂の妻君、空穂に私語して、「歌で想像したのとはすつかり異つて、餘り奇麗な方ぢやないのね。」とBたるもの、この語に對しても、直ちに美顔術を受ける必要があるとやら、ないとやら。

前田夕暮はいよいよこの四月に妻君を迎へることになつた。この話はもう三四年以前からのことで、さぞ御自分嬉しいだらうと、岡燒連の噂とりごり。若い獨り身な奴等は、エヘン、そねめ、そねめと今頃は夕暮さぞヤニ下つてゐるだらう。歌集も出たし、先づこれで一仕事片付いたといふものだ。

太田水穂は、諸雜誌の歌に評やマークを付けて、赴任してる妻君の許へ、絶えず送つてゐるさうだ。何處にも發表はしないが、その妻君は頗る歌が巧いとのこと。

若山牧水の今度の歌集『別離』には、愈々牧水の寫眞が出るさうだ。北原白秋曰く「止せばいいのに、肖像出したら、却つてあの歌集は賣れなくなるよ」と。この語の意味は一寸わかるまい。（明治四十三年「八少女」所載）

一人でいらつしやい

死んだ若山牧水。漂々然として「酒さへ飯んでゐたらエエ」といふ仙人見たやうに、取扱はれてゐたが、アレでなかなか隅に置けないところがあり、妻君以外にキヤッチしたのが三人はあるとやら、ないとやら。

一人はいふまでもなく、大阪の尼將軍かへて女史で、これはすこし受身の体。

浪華女に戀すまじいぞ旅人よただ見て通れそのながし目を

の對象と云はれ、この歌が本當なら、結論はつけてゐなかつたかも知れない。（この歌のある一聯の中に

をんなごも手打ちはやして泣き上戸泣き上戸とぞわれをめぐれる

みさをなき女のむれに……

なごのあるので、この浪華女は花柳界の女を指すといふ異論も成立しないこともないが。）

その次は、牧水の、あまり多くない小説の一節。

「……先へ寢て、女がさらさらと帶をとく音を聞いてゐる時にも、男の佗しさはあるものだ」

その帶を解いた女、これは單なる架空小説で、從つて架空の人物であるかも知れないが、所謂告白小説の流行時代の事だから、ホンモノの人物があつたかも知れない。

その次ぎが山田某子。その山田某子が信州から出て來て一番に訪問したのが、飯田河岸の日英舍といふ印刷屋の一室を間借りしてクスボッてゐた牧水の部屋だつた。

その時、今一寸おもひ出せないが、山田には連れがあつたので、ヤヤコしい話も出なかつたらしいが、送り出した牧水が、ソッと某子の耳に囁いた言葉が、ナントかの次ぎには一人でゐらつしやいネ」

「この次ぎには一人でゐらつしやいネ」

――その後山田が一人で行つたか、行かなかつたかは、勿論筆者の知るところでは無い。（明治四十二年）

文明のスキ燒

土屋文明は野蠻人で、凡そ藝と名のつく樣なものは、一切持ち合せがあるまいと、何人しも思ふに違ひないが、あれで、盆栽植物學には相當自信があると見えて、青山南町五丁目のアララギ發行所の裏手の自宅には、大小の盆栽がギッチリ、附近の梅窓院の緣日にはかならず出掛けて、一鉢さげて歸る。

「スキ燒」

齊藤茂吉の話に依ると、このスキ燒は優に名人の域に達してゐる相である。そして茂吉は誰にでも、直ちに約束をする。

「近い内に、土屋のスキ燒を御馳走するよ。」

だが、この手形は大抵不渡りに終てゐるらしい。（昭和十年）

僕を知らないか

女高師の下田次郎博士がある年の春、生徒を引率して、奈良飛鳥地方に修學旅行

に出掛け、或小學校の前を通ると、丁度体操の時間で、生徒を休憩させてゐる教師がゐた。博士は名刺を出して、

「何人か、此附近の史蹟や名勝を案内して呉れるものはないでしようか」

と尋ねて見た。教師は、しばらく博士を輕蔑したやうな目で見上げながら言つた。

「貴下は僕が辰已利文でここにゐるといふことを知らなかつたのですか。」

勿論、博士は鳩のやうに目をパチリパチリさせたに違ひない。（昭和二年）

御要心

奈良見物、萬葉古蹟見學に大和地方へ行かれる計畫が出來ても、そのプランをあまり早く豫告しないがいいです。

あなたが、少しく世間にその名を知られてゐた爲めに、ニュースとしてあなたのプランが新聞か雜誌に依つて傳へられると、貴下は奈良へ着いた時、思はぬ案内の押し賣に出逢つてドキマギさせられるおそれがあるからです。

「これは便利だ」なぞと思つたら、「俺の名を知つてゐて呉れたか」とヤニ下らうものなら、忽ちにして、乘物、中食、寫眞と、その案内者は思ふ存分、貴下の財布を輕からしむることにこれ力めるだらうからです。

若し萬一、その案内者が出した名刺に、次ぎの樣に記されてゐなかつたら、あなたも、少しは警戒をゆるめてもいいかも知れませんがネ。曰く、「××會大和支部長、××文化學會長、短歌雜誌『××』主宰　××××」（昭和十一年）

結社商買

「結社が商賣になるものか」

と一寸不思議に思へるかも知れないが、そんな疑問が起つたら、生田蝶介を思ひ出すべし。大脇月甫を思ひ出すべし。山本康夫を思ひ出すべし。大脇も山本も、生田の『吾妹』にゐたことを思ひ出すべし。

生田があの歌壓で、あの伎倆で、歌壇からは馬鹿にされながら百貫内外六十錢の雜誌を、同人は毎月十冊宛（金六圓）準同人は五冊宛（金三圓）責任負擔といふべラ棒極る鐵則を設けても、卷數十四卷を數へ、元來は大衆小説家でありながら、近頃一かう書いたやうにもなくて、『吾妹』の社費だけの收入で、あの豪奢な家に住み先生先生でヲサマつてゐるのを見ては、何人も

「何人か、歌ではめしは喰へないといふものぞ」

と喝破したくならうといふものではないか。（昭和十二年）

風呂に入れる

文壇では今、

「お土砂をかける。」

といふ言葉が常用されてゐる。「ニコボン」と同義である。對手の亢奮を靜めるといふ本義から、「先手を打つ」といふ意味にも籠絡するといふ意味にも轉用されてゐる。

歌壇では、此場合に、

「風呂に入れる。」

といふ言葉が用ゐられてゐる。社友が初めて主宰者を訪問する。主宰者の家に丁度風呂が立ててあれば勿論だが、立ててなければ早速立てて、

「君！一風呂浴びて來たまへ。」

「先生はお濟みですか。」

「オレはまだだが、君はお客樣だから先へ入り玉へ。」

そこで社友は主宰者の好意に、感謝措く能はず、ひたすら忠誠を心に誓ふといふことになるのである。

「××も風呂へ入れはじめた」

といふと、「社友統御がウマクなつた」といふことになるわけである。

この發案者は、生田蝶介あたりらしい。（昭和十年）

『獨り歌へる』の原稿

鷲野飛燕の手許にある『獨り歌へる』の原稿（全部ではない）について、喜志子未亡人から若山家へ貰ひたいといふ話があつた。人のいい飛燕は一も二もなく承知したといふことを聞いた尾崎久彌、あれは鷲野飛燕の個人のものでは斷じて無い、舊八少女會同人の共有物である、鷲野飛燕が保存して居ることに異存は無い、また結局は若山家へさしあげるにしても我々舊『八少女』同人に一應の相談はあつてもよいではないかといふ横槍に一まづ有耶無耶といふ形となつた。

無論あの『獨り歌へる』の出版については八少女同人はそれぞれ出費して出版してゐるのみならず、とんと賣れなかつたので最後に三册一圓で無理やりに同人や知己に押賣して處分した事實さへあるのである。（昭和十二年）

反對者

世の中には、ナンでも人のすることには、一理屈コネて、反對して見なければ承知の出來ないといふわるい癖を持つた、病的な人間共も少くはない。さういふ人間は、「世は濁れり、われ一人清し」といふ矜持をもつてゐて、それが正しいと信じてゐる。

そして、何時も、その爲めに、多少の損をしてゐる。損をしてゐながら滿足し、それを誇りとしてゐる。

それが眞に誇るに足るべきか、病的心理の所有者として、憫殺せらるべきかは、その反對されたものと、反對理由とを考察してのちに、はじめて定められねばならぬ。

歌壇ではさきに、日本歌人協會が改組されて大日本歌人協會になつた時、その形式又は內容に對して、數々の反對意見や、抗議が提出されたが、或るものは、マアマアで押しつけられ、或ものは、何時の間にか損得を考慮して、グヅ、グヅの中に入會して了つた。

そして結局、ごこまでも反對を表榜して入會勸誘を拒絕したのは、金澤種美（水甕）タツタ一人に過ぎなかつた。

今は、改造社の『新萬葉集』に對して、同樣賛否の議論が、各誌を賑したが、堂々と理由を掲げて、收載を拒否したのは、宗不旱一人だけである。

さア、御立會！

反對者がツムジ曲りの異常心理者か、反對されたものの方に、それらの論據をクツがへすに足るだけの、立派な申わけの言葉を持ち合せてゐるかごうかを、トクと考へられて然るべく存ずる。（昭和十二年）

善麿と才と歌と經濟學

土岐善麿は、今ではもう完全に、歌壇人ではない筈なのだが、歌人協會を牛耳つてゐるやうに見えるのは、へんなものである。

といふと、牛耳つてゐるのは北原白秋ではないかといふ半疊も這入り相だが、なるほど白秋は幅を利かして、白秋の聲がかからなければ……と云ふ風にも見えるが、白秋はさすがに童謠作家でもあるだけに、ごつちかと云へばお山の大將として祭り込まれてゐれば、それで滿足してゐるので、上邊だけ奉つてゐればいい傀儡であるが、善麿はさうは行かない。

善麿はそんなに單純ではない。斷るまでもなく、彼はジヤナリストだ、押しもあればねばりもある。ごつちかと云へば、詩人離れのした策士なのだが、なまじひに才を持ち合してゐる爲めに、それをコネ廻すことに依つて歌を詠んで來たのである。

一体、あの頃の歌よみは才さへあればよかつたのである。イヤ、よかつたと謂つて了つては語弊がある。かういふ風に云ひ改むべきだ。

——才氣でデッチ上げた歌が持てはやされた時代である——

さういふ時代は、間もなく降替して、氣を失つて了つた筈なのだから、從つて善麿の歌人としての存在も、哀果時代で終つてゐるわけであるのを、今日まで、歌詠みのつもりで善麿自身も、歌壇大衆も許してゐるのだからおもしろいのである。

才人が、才を弄んで、行き詰るのは當然でちつともをかしくないのだが、才人だけに、それを行きつまつた樣に見せない胡麻化し法を心得てゐて、歌壇はウマクなめられてゐるのである。

それに何と云つても、才人で、而かもジヤナリストだ。おなじジヤナリストでも、柳田新太郎あたりとは、甲羅の生へ樣が違つてゐる、年輩から云つても、親と子だ。齒の立たないのは當然である、

だから、改組問題の際でも、その間のコツを善麿は知つてゐて、若いヤツ等のイ

キリ樣を鼻の先に皺を寄せて嗤ひながら、同情する樣な、ケシかけるやうな、正義振つた樣な物の言ひ方でアシらひながら、積極的には何等の工作にも出なかつた所以もそこにある。

積極的に仕事をするのをイヤがる事は、彼善麿に限つたことではなく、歌人協會のおレキレキばかりでもなく、歌人一般に行き亘つてゐる先天性なものであるかも知れない。といふことをウラから云へば、積極的に出るといふ事は、まだ一人前の歌よみになり切れてゐない、鼻たれ仲間だといふ意味にもならうといふものである。

出來るだけ仕事をせず、出來るだけ多くの効果を收めようといふのが、經濟學の根本原理だといふことだから、ウタヨミは經濟學者といふ事になり相な氣持もするが、これはごうも、さらに考へて見る必要があり相である。

といふのは、そのウタヨミが、一向勞力に對する報酬といふ事をよく考へたことがなささうだからである。イヤさういふことを考へるのは歌よみでないかの如く考へられてゐるからである。

だから、善麿が、歌よみ仲間に執着を多分に持つてゐながら、歌を詠まないで、といふよりは詠めない處から、歌澤や、長唄をつくつて報酬をカセいでゐるといふ處へ、はなしを持つて行けば、此一項もごうやら結論らしい處へ、辿りついた樣である。（昭和十二年）

東聲のみれん

橋田東聲が、妻君××子に逃げられた當座の悄げ方は、他の見る目もはがゆいほどだつた。而もその對手が、御弟子の某で、年も若く、金もあり（日本橋株屋の御曹子）伊達男といふのであるから、形容枯槁、弱氣の東聲はどこから行つても寸分の勝味もない、そこで屈辱を忍んで、哀訴嘆願に及んだが、

「某との關係を承認の上なら……」

といふ條件を持ち出されて、ペチヤンコにやつつけられて了つた。

その上、さうしたイキサツを、綿々とあはれつぽく綴つて、『婦女界』だつたか『婦人世界』だつたかで告白したので、可なり世間の同情はひいたものの、その爲勤め先の某大學を辭めねばならぬことになつて了つた。

然るに皮肉は小說よりも面白く、東聲の退いたあとへ、後任として講座を繼承したのが、何と、對手の某だつたのだから、只さへ、泣き面の東聲の顏が、いよいよ深刻になつたのも不思議でない。

まもなく、妻君のあとがまを見つけだして、今度は要心ぶかく、先例をふましめない樣、積極的に愛撫すると同時に、消極的にも警戒をさ〳〵怠ることなく、つとめたので、其点は無事だつたのだが、さて、お弟子達の人氣はごうもよろしくない。たれもかれも、

「さきの奥さんの方が」

といふので、だんだん寄りつかなくなつて了つたので、たださへ淋しがりやの東聲いよいよさびしく、いつまでも、いつまでも、××子への未練にさいなまれながら死んで了つたのはあはれといふもおろかであつた。

その××子が、今の××××××である。（昭和十年）

啄木、化けて出ろ

近頃はまた、再檢討なぞと謂はれて、啄木も下り阪に入つたが、一頃の人氣は凄いものがあり、さすがに與謝野鐵幹は「山柿以後啄木一人」とは叫ばなかつたものの、世間の人々の評價は、殆んぞそれに近いものがあつた。最も與謝野の爲めには、啄木は叛逆者なのだから、元からこころよくは思はなかつた上に、啄木の本とうの價値は百も承知であり、且つは、「日本詩人を代表せしめて、世界に恥かしくない者は、奈良朝に赤人、人丸、現代に於ては與謝野晶子」と講演の壇上で叫んだほどだから、啄木を持ち上げないのは當然である。

數へて見たら、啄木をエラクして了つた爲めに、懷を肥した幾人の「啄木研究家」といふものをつくり出したのは事實である。

それらの者共が、眞に啄木を推賞するのが目的であつたか、然かすることに緣つて原稿料を稼ぐのが目的であつたかは、今に疑問とせられる處である。

ナニしろ、啄木は、生前あれほど人生貧窮のドン底に、ノタレ死同樣の死に方をしたが、死後は數多くの人々を潤したのは皮肉であつた。

その死の床には、僅に妻君と、金田一京助と土岐哀果の三人だけだつたと謂はれ、富田碎花は、その死を聞いて、それでも幾らかの香奠をするつもりで出掛けながら、途中で例のヅボラが頭を持ち上げた爲に、コップ酒にして呑んで了つたといふのだから、以て啄木の世の中、イヤ、歌壇に於ける人氣といふよりは扱はれ方が、どの程度であつたかといふことが推しられるわけである。

それが死んで了つたら、忽ち、天才だ神樣だと祭り上げられ、キリストを讃美するよりも、啄木を讃美した方が、より多くメシの種になるといふ時代があらはれたのだから、世間が驚くよりも、啄木自身が驚き入り、呆れ返つてゐるに相違ない。

ヒョツとしたら、切齒扼腕、化けて出て、割り前を强要したい衝動にかられたかも知れないのだが、啄木から僕の處へはさういふ口吻を洩した手紙も來てゐないから、ここにハツキリとそれを取次し得ないのは殘念である。（昭和十二年）

聞いたまま

雜誌『スバル』に「短歌界消息」を少陵生といふ人が書いてゐる、この少陵生の本名は誰であらう？法曹界の新人露花・平出修である。その曰く因緣と申すよりもお伽噺にでもありさうな一席、少陵とは小さな丘、小さな丘は平地より少しく出てゐる。で平出は平を出ると書く、ここから少陵とつけたのださうです。

同じ「スバル」に木下杢太郎と言ふがある。これは太田正雄であるが、ある人、「木下杢太郎は可笑しい」といふと「雅號と思へば可笑いかも知れんが、藝名と思へば左程でもない。僕に於ける木下杢太郎は別に本名のある義太夫語りが、竹本小土佐の名を持つてゐるのと同じだ」と答へたさうだ、太田は竹本小土佐が大好きだとの事である。

ある所で藤井白雲子が今度出た北原白秋の『邪宗門』を高遠なものだ、と驚いてゐた。實際大相なものだ。標題の字は外國人の書いた日本字に似せたものださうな。

土岐哀果は二月十九日に結婚した。さて此の間うち大變さうらしい歌にお目にかかつたのだ、夫人は中村たか子と言ふ。久しい交際があつたのださうである。（明治四十二年「八少女」所載）

態度一變

兒山敬一は同姓故信一の弟である。

信一が生存中は、ほとんど手紙の往復もしないといふほど仲が悪く、敬一は信一をいつも、

「あいつは馬鹿だ。」

と公然罵倒してゐたものだが、さて信一が死ぬと、同時に、忽ち態度を一變して、「兄貴、兄貴」と奉り、何かと信一の顯彰に力めはじめたので、生前の兩者の交渉を知つてゐたものを、狐につままれた樣な氣持にさせたり、憤慨させたりしてゐる。

死亡通知は妻君浪子の名に依つてせられたのが、水甕の連中や、學士會からの香奠や、同情金に對する禮狀には、もう妻君の名が除かれてゐたには、それらの關係者一同、呆然これを久しうしたといふことである。（昭和八年）

新刊紹介

「從來の短歌形式に不滿を持つた金子氏は、昭和の初期より、內容にも形式にも一の革新を企て、新短歌の研究を始め、かくて新しき形式の短歌を創造した。本書はその試作集であり注目すべき書である。」

といふのは、金子薫園の歌集(?)『白鷺集』に對する或新聞の紹介記事である。

これは正しくは、次の如く紹介せらるべきであつたのだが、ごうしたもののはづみにか、間違つて了つたものに相違ない。

「從來の短歌形式を守つてゐては、もうごうにもならぬ程感情の硬化して了つた金子は、明治の晩年頃から、門下のニキビ青年の血氣に寄生して、何かの轉回策を講じさせてゐたが、昭和の初期には、いよいよアガキがつかなくなり、內容にも形式にも、何とかゴマカシ策はないものかと焦慮してゐるうちに、イチ早くもヒ若い連中が變な恰好のものを歌だと稱して現はれ、而も相當に追隨者を得はじめたのを見て、大に驚き、これではならぬと、それらの若者の尻馬に飛び乘り、同病相通ずる夕暮なごと共に、多年の經驗からインチキ理論を捻出して、その掩

護のもとに、ヲカシな形のものを歌だと稱して作りはじめた。本書はそのサムプルであり、嗤笑せらるるに十分な僞作品集である」

由來新聞の「新刊紹介」といふものは、凡そ御座なりのもので、序文、又は跋文だけを讀んで即座につくり上げて了ふ不誠意なものである。だからかういふ紹介文が現はれるのも敢て不思議とするに足りないわけである。

かくして紹介されるといふことが、何がしかの、相當高價な廣告料を節約するといふ意味のもとに、その不誠意を承知の上で、新聞社に先づ一本を寄贈するといふ事になるのだが、そこではよくよくの場合の外は、決して惡言はせられない。その爲めに受ける制作上の示唆は得られなくとも、その實の印刷實費と送料だけで、機關雜誌などでは思ひも及ばぬ廣範圍への宣傳の實を擧げ得ることを考慮すれば、十分採算は出來るわけである。

だから、『東日』、『大毎』での、蘇峰の筆に載せられることの廣告價値を目ざして、あの御座なりの、見當外れの素人言をも喝仰して、恥づかしくもなくワンサと持ち込まれてゐるわけである。

どうして、どうして「歌よみはソロバンを忘れてゐる」などといふのは昔の事。近頃の歌よみには、ソンなおつとりしたテアヒなどは一人も居らない。正に宣傳時代、宣傳の爲めには、義理も、人情も、面目玉も、肝癪も、茄子もヘチマもあつたものではない。三行でも五行でも、タダほど安いものはないといふ乞食根性を丸出しにして、送りつけるので、時にかういふ間違ひ紹介も出て來やうといふものである。（昭和十二年）

順、憲吉、篤二郎、英一

新古今に關する著述もあつて、良寛嫌ひ、万葉ギラヒを表看板にしてゐる川田順であるが、アレで中村憲吉が香櫨園に住んでゐる時分には、暮夜ひそかに訪れて作品を見て貰つては

「なるほど、大きに、大きに。」

に頭を下げてコソコソと歸つて行つたのも、さう遠い昔ばなしではない。

さうしてゐる一方、尾山に貢いだり、松村に取り入つたりして、短歌雜誌で太鼓を叩いて貰つたのださうである。

尾山が大阪へ來れば、會社への行き歸りに立寄つてはアレよこれよと御機嫌とりにこれ力めたものである。小遣を置いて行つたり宿賃を代辨したりしたことも一再に止まらず、『國民文學』一黨が六七人も、御影の邸宅に無料宿泊して京阪神を數日間行樂したことも有名なはなしである。

でなければ、あまり評判のよくなかつた『心の花』の下積同人が、あゝ急ピッチを上げてノシ上つて來られたものではない。

さういふ關係から、尾山、松村がノサバッてゐる歌人協會位は、ごうにでも動かせるとタカをククつて、大橋や柳田の糸をひき、新組織がなると、佐々木信綱を會長に押し立て、自分は秘書役氣取りで更に一伸しようとしたわけだが、ドッコイソウウマク問屋は卸さず、釋迢空のアの爆彈宣言となつて、計畫は畫餅に歸するばかりか、御庫に火がついて、川田自身の進退をまで云云されるやうな形勢を引き起して了つた。事實、流石の尾山をしてさへ、

「ごこまでわれわれは川田を支持しなければならないのだ。」

と呟かしむるに至つたのである。（昭和十一年）

信女は顔まで赤い

千本松の未亡人、近頃よく京都へおまゐりに來ると聞いた京都の歌よみ仲間、主人の冥福を祈る爲めにしては、時期が少し變なので、不思議に思つてゐる處へ、恰もよし社中某の處へ珍らしく近日上洛と前觸が來たので、一夕歡迎宴を開くことになつた。

さて、日取の都合を相談するために、驛へ張三李四が迎へに出ると、二言三言その社中の某君に耳打ちしただけで、京都へは下車せず、その儘山陰線へ乘り換えて了つた。あとで某に問ひ詰めると、

「龜岡へ行かれました。今夜はお泊りで、明日の夕方引き返して來られます。」

といふ。亀岡ときくと、カンのいいのが「ハハン」と皮肉な笑ひを頰に浮べて、ニタリとしたものである。亀岡——大本教——王仁三郎——精力——歌壇進出——金——未亡人——『××』の經營——と連想を走らせて、ゴクリと更めて唾を呑み直した。翌夕、歡迎會席上、

「奥様は近頃よく京都へ入らつしやる相ですね。」

と皮肉屋。瞬間、パッと耳まで眞赤にして、未亡人、

「いいえ、そんなでもありませんワ。」

その聲は狼狽にふるへて、蚊のなくよりも細かつたといふ。（昭和九年）

名古屋の生んだ女性歌人

歌集『ふるへる花』『愛と自然』の著者原田琴子は名古屋の産、明星、スバル、青踏に活躍した女性で、あとにもさきにも名古屋にはこれ丈の女性は無い。現今二

三の金出し同人や、御隱居歌人の遠く及ぶところで無い。

彼女は慥か明治二十二年の生れ、名古屋の旭廓と云へは言はでも知れた色町で、金水樓といふ青樓が彼女の住家であつた。度の强い眼鏡に赤リボン、その當時流行の二百三高地といふハイカラ髷であつた。明治の末期名古屋から歌の雜誌なども出してゐた。かなり活潑な歌の詠み振りと生家が青樓であるといふので幾多のニキビ黨歌人がよると彼の噂をしたものであつた。

當時ワザワザ岐阜縣から、山本白泉、柴田清美、足立桑風といふ自稱業平朝臣が金水樓を訪れて、不在を喰つたといふことであるが彼等はいづれも面會した如く吹聽してゐたのは笑止であつた。

後、新詩社の某に對しての初戀は成立せず、その後山梨縣の某に嫁ぎ澤山の子女を殘して早世した。私にはまだ彼女の歌が記憶に殘つてゐるが、今生きてゐたらよいおバアさんである。（昭和五年）

御無理御最も

「ナア、オイ君！」

「コイツは拙いな、オイ！」

といふ風に、ざつくばらんで、碎けてゐるやうに見える太田水穗老も、潮音社中に對しては、威儀嚴然と構へてゐて、オツカない先生振りだといふことである。

だから、社中の若いところはちりちりして、その一嚬一笑に氣を配つて、水穗のいふことはナンデもカンでも御無理御最も。その作品に對して、意見がましく、批評がましいことは、最もおそれ多い所業として戒め合つてゐるわけである。

只一人、老の作品をヅケヅケと批評もし、經營に對しても意見を具申するのは、所三男だけである。

だから社中は、彼所三男と一共に、水穗老の御機嫌伺ひに出ることを、極力回避してゐるといふのは、ウソのやうなホントウのはなし。（昭和八年）

賣物

「ひさぎ會」といふのがある。

今井邦子、若山喜志子、中河幹子と云つたやうな東京女流歌人のトツブを行くとても云ひたげな顏ぶれである。

それで「何をひさぐ」のかと云ふ疑問が生れるわけだが、

「名を賣る。」
では知名の女流歌人といふ意識を裏切ることになるわけだから、それではないらしい。
「顔を賣る。」
これも同樣、トツプを歩いてゐるといふ自信にふさはしくないものがありさうだ。
「賣れ殘り。」
といふ言葉もあるが、オールド・ミスなごはゐさうにもない。ゴケはゐるが、今度は「賣れ殘り」といふ言葉の方で、御メンを蒙るさうである。
そこで、モ一度、ツラツラおもんみることに依つて、はじめて、
「ナール程、女流だからの賣物をタツタ一つもつてゐる。」
と氣がついて、さて「それでは」と一膝乘り出して見たんだが、——
「いやはや、ごうも、瓜やカボチヤばかりで、ネ、」と云へば、側から、半疊を入れるものがあつて、曰く、
「それに、みんな、しなびてゐる。」（昭和十二年）

肩書

歌壇には、相等以上に肩書を持つてゐる者がある。けれごもその肩書を武器にして、群小歌人共を威迫しようとするやうな、ヘゲタレ根性のものは、ゐなかつた筈である。
だから、肩書を持つたものも、つとめてそれを用ゐないやうにしてゐたものだが、近頃はさういふ氣風が大分崩れて、チツトモ歌や歌論そのものの權威を增すものとも思へない處へレイレイと法學博士だの、醫學博士なごならまだしも、何々株式會社取締役なごといふのまでが、時折あらはれるのだから不思議である。
そして、聞いて見たら、「別に用ゐた覺えはないのだが、編輯者の方で勝手につけ加へたのだから困る。」といふ。ナール程、さういへば、肩書つきで出てゐる歌誌は、辰己利文の『嚴檀』と杉浦翠子の『短歌至上主義』ばかりのやうでもある。
一方は田舍の鼻垂れ小僧の先生樣、一方は慢性ヒスの自惚女史、……無理も無い、無理もない。（昭和十二年）

『アララギ』はどうなる

萬葉の『アララギ』主義……イヤ違つた、『アララギ』の萬葉主義も久しいものだが、近頃の『アララギ』を初めて見た人は、一寸變な氣持がするに違ひない。

誌上では、萬葉萬葉の一天張りで、議論し、研究し、解説し、鼓吹してゐる一方、その作品に至つては、下々の雜輩は兎も角、茂吉、文明をはじめ、所謂選者級のごこに、萬葉らしさ、萬葉調のまする振りが見られるのだ。

鼠の巣片づけながらいふこゑは「ああそれなのにそれなのにネ」　茂吉

吾友ら多く吾より若き中に醉ひてみだるる二人か三人　文明

ごこに、萬葉のおもかげがあり、ごこにますらを振りが見えるといふのだ。

前者はこれ、流行の言葉（ますらをぶりとは完全に反對する）をお調子にのつて採り入れたといふ以外、そこに何があるか。

後者はまた、何といふ氣のぬけた若年寄りの詠嘆であらうか。

オソらく、彼等の先輩子規が極力排擊した貫之でも、コンナ馬鹿馬鹿しいことは詠まなかつたらう。

吾友ら多く吾より禿げた中にゴマ塩のあたま二人か三人

吾友ら多く吾より貧しきに金ブチ眼鏡か二人か三人

吾友らわれよりマヅイその中にちよいと見られる二人か三人

チヨイとペンを持ただけでもう三つも出來るといふほど、おヤスイ作品である。

茂吉の「ああそれなのに」に對して、ごこかには「茂吉にしてやられた」とその流行を捉へる機敏さを讃嘆（サンタンにあらず皮肉つたのだなごと言ひ譯無用！）したアワテものもあつた相だが、さういふウロタへたヂヤナリストにノサバらして置く歌壇だから、いつまでたつても、文壇から馬鹿にされてゐるのである。

一体、歌壇のジヤナリストは、歌壇を批判し、指導する處か――イヤ脱線、脱線。――

そこで『アララギ』よ何處へ行くだが、親玉連中が、かういふ風に御座なり主義に轉向して了つてゐるのだから、先きは見え過ぎてゐるといふものがある。

『アララギ』を今日の地位に押し上げたのは、茂吉の熱と、赤彦の鬪爭力の然らしめた處であるが、赤彦なき後は茂吉の獨り舞台であり、文明支配人の腕のふるひやう如何に、未來の運命がかけられてゐたのだが、その文明が案外見掛け倒しで、赤彦系統の壓迫ばかりに熱中して、『アララギ』全体の行くべき方向を的確に認識し得なかつた處へ、續いて憲吉に死なれて、茂吉を牽制するブレーキを失つて了つたのと、文明自身の藝術的動向に混亂の拍車をかけられて、今日ではもうどうする

ことも出來なくなつて了つてゐる。

一体茂吉の作風に變化が見えはじめた時、イヤ作品にまであらはれぬ先に、茂吉の行きつまりに氣がつかねばならなかつたのである。そして、極力その更生法を講ずる樣進言すべきであつたのである。然して、その時にアッサリと萬葉の放棄を宣言し、堂々新方向を建直して、『アララギ』の方向大轉換を、茂吉の名の下に號令して、家光の故智に倣つて、乾坤一擲の大バクチを打つて、一統の去就を正し、殘つたもののみを率ゐて、茂吉のアの押しの一手で、獅子吼すべきであつたのだ。

その時なら、茂吉もまだ熱と野心とを失はないで、新しい活動を復活させることが出來たのだが、今日ではもう手おくれである。ガンバればガン張るほど、作品の傾きはこれを裏切つて行くばかりである。アセればアセるほど『アララギ』の權威は失はれて行くばかりである。

それでもまだ今日では下々の雜輩ごもは『アララギ』會員であることを名譽とする錯覺を失つてゐない爲めに、急に目に見えてその屋台骨が動搖することもあるまいが、結局それは時間の問題である。その「歌壇第一の大結社」の實と、「歌壇の本流意識」の名とは、漸次に失ひ、失はせられ、「傲る平家は……」の嘆きに近づき行きつつあることは、最早疑ふ余地もない。（昭和十二年）

『水甕』はどうなる

『水甕』がアレだけ水脹れに脹れて、一向バンクもしさうにないのを、不思議に思つてゐる者があるかも知れない。

處が『水甕』はオン大柴舟は勿論、幹部をはじめとして中堅新進の大部分が教員で、婦人は柴舟の、男子は直三郎のお弟子孫弟子といつたつながりを持つてゐる爲めに外ならない。

岩谷莫哀が生きてゐた頃、死後しばらくは、おのづから、石井系、岩谷系があつて、その間いろ〳〵索動する者もゐたらしいが、外部へはあまりあらはれずに濟んで了つた。

今日では、柴舟直系の二三人、岩谷系三四人を除けば、あとはほとんど石井系ばかりだ。その柴舟直系の二三人は神樣格の元老に祭りあげて、必ずしも敬遠せず、少しは馬鹿にしながらも奉つて居り、それらに依つて岩谷系の三四人を押へさせてゐるので、ここの處太平無事らしく見える。

直三郎の死後は、東京へ持つて行つて、金澤がやるだらうといふ觀測は、内外その見を均しくするものがあつたが、そのことなく、依然名古屋にて松田がやること

になつたのには理由がある。

金澤は、長らく地方を轉々して柴舟に遠ざかつて居た上に、作風も近頃は、柴舟の所謂中正穩健から外れ、ソレに昔『車前草』を編輯して、第一卷第一號を歌壇には珍らしい發禁させて了ひ、氣の小さい柴舟は度肝をデングリ返した苦い經驗があり、それ以來お覺えはあまり芽出度くない。

むしろ柴舟には、『眞人』の細井魚袋にやらせようといふ腹が十二分なのだが、細井は『水甕』とは今の處をかしな具合になつて了つてゐる。

といふのは、社友全体の希望で細井の除名を石井に迫つたのだが、細井は朝鮮から歸つてから柴舟邸に入り浸つて居て、三太夫のやうな、支配人のやうな恰好で、地所や家作の差配を一切やつて居り、柴舟のお覺えが頗る芽出度い。何でも細井君細井君なのだから、その細井の除名を柴舟に持ち出しても、到底容れられ相にもないので、マアマアと押へ來たのである。そして選者を罷免しただけで、社中では除名したつもり、細井の方ではオン出たつもり、柴舟はまだ細井は幹部同人のつもりで、ソーッとして今日に及んでゐる、だから三四年以前から、細井と、その股肱の市山盛雄、道久良の三人の名は依然として、同人名簿に出てゐる筈なのだが、一首の作品をも誌上には見せてゐない。

だから、今、『水甕』を細井にやらせるとなれば、結局は總退社で解散同樣となり、『眞人』が『水甕』と改名することを意味するに止る。

そして『水甕』は現狀のまま全然柴舟から獨立して新に結成を見るのは必定である。或は四分五裂して、四五種のものが發刊され、それらが共同して、細井に當ることにならぬとも限らぬ。

さうなれば、細井を生かさうとしてしたことが、細井を葬る結果になつて了ふわけだから、凡てに打算的で積極的にごうしようといふ考へのない柴舟としては、最も拙策であることは百も承知してゐる筈である。

金澤は金澤で、苦勞人である。今順調に行つてゐる『水甕』を謀叛の名を負うてまで飛び出して、一派を立てた處で、勞ばかり多くして効少く、さう急に『水甕』以上のものをつくり出すことの困難さはよく知つてゐる筈だからである。

だまつて、隱居然と、をさまつてゐても、若い處には案外信賴があるといふ自惚を持つて居り、自ら勞することなくして、その効だけを收めようといふ、圖太さと、なまけ根性と、呑氣さとをカクテルにして、トクと胸の底にノミ込んでゐるクセ者だからである。

その外には今の處、御家を横領しようといふ黑主も居さうにない。若い處には二三らしいのがゐないこともないが、凡そ齒の立つやうなのは見當らない。下手をやれば御自分だけがオン出されることになる。——オン出されたら、手を受けて待つ

てゐる處はザラにあらうが、その爲めに『水甕』の屋台骨が急にぐらつのかうのといふことにもならないし、といつて御自分に箔がつくわけでもない。

結局は幹部といふ餌で、負担（物質の）を重からしめられるのがオチであらう。だから、まだまだ當分は『水甕』も、不思議なお伽噺の國のやうに、歌壇の一角にセイゼイぼうふらを養成しつづけて行くのも知れない。（昭和十二年）

『心の花』はどうなる

歌壇では、一番老舗である。

主宰者も二世三世でなく、はじめからの佐佐木信綱であり、雜誌も改題なごせぬ、はじめからの『心の花』である。（『心の華』であつた時代もあるが、『阿羅々木』の『アララギ』よりは變化がないと謂へる。）會名「竹柏會」は先代弘綱の「竹柏園（ナギノ）」の號に緣つたのであるが、その號もそのまま信綱が繼いてゐるので、「竹柏會」の會名は、信綱の號に因むものであると謂ひ得るわけである。だがそのよみ方は、「チクハク會」といふ風に、その會に屬する人々にも呼ばれてゐて、「ナギの會」とは何人も呼ばない樣である。但し最初の頃には、發行所名を「鳴鶯吟社」と呼んでゐたこともあり、「和歌共勵會」といふ、各派合同の歌會詠草を發表する

機關にも使用せられ、子規、鐵幹などの詠草が現はれた事もあるが、「心の花」の主体は佐佐木信綱であつたことには變りはない。

それだけの傳統を持つた雜誌で、最初の宣言にも「如何なる流派を問はず」と謂つて居り、今でも、信綱はやつぱり「おのかじし」を口にし、中正穩健をモットウとしてゐるわけだが、長い間には、おのづから消長變化があり、曩きには木下利玄のやうな異風が出て、後には石榑茂、前川佐美雄のやうな突飛なものも出たりして、少し變つたのは、漸次脫退して、華族のお姫樣や、實業家、政治家などの、謂はば旦那藝、素人藝と云つた連中で固めて來て居り、また將來に續いて行くことであらう。

さういふ人々をあしらふには、會主信綱は頗る妙を得てゐる。即ち、來訪をうけたり、招待されたりして、面と向つて詠草を見せられた時には、そのよき所ばかりを指示して、讃め上げ、おだて上げて置き、雜誌へ載せる爲めには、極力斧鉞を加へて、完膚なきまでに改作して了ふといふことである。

それでも、若い學生や、鼻柱のつよい藝術家肌の作者の作品に對しては、例の「おのかじし」のモットーに從つて、頗る寛大な取扱ひをするのだが、血の氣の多い連中は、それにさへあき足らないで、漸次、一人へり二人減り脫退して行つたものだが、この傾向は、尙ほ將來にもつづくものと見て間違ひはない。

最近、川田順が、少し世間的に知られて來たのに乘じて、編輯方針に關して、種々と進言して、その支配權を委任されたもののやうな噂が洩れたが、川田順にした處が、財力に惠まれてゐる爲、あらゆる方法の下に百方歌壇を遊泳した結果、得た處の盛名で、別に、特異な存在でも、大才でもないのだから、委された處で、さう飛躍的に、傳來の『心の花』をごう改めるといふ事も出來ないのは判り切つたことである。

そして、世の中には、有閑なお姫樣や、旦那藝を弄ぶ政治家や實業家がアトを絶たず、それに迎合しようとする宗匠風に依つて、オダて上げられることを喜び、藝術良心の下に、手嚴しくやられることを、それらの人々が喜ばない以上、そして『心の花』の經營方針が、それらの人々を除外しては立て得ない以上、一川田順が如何にシヤチホコ立ちして見たところで、ごうなるものでもない。

やつぱり、この雜誌『心の花』は從來もしかあつた如く、將來もまたあらねばならぬ。そして、第二、第三の前川や、石榑が出れば、出るたびに脱けて行つて、丁度川に投げられた石は、一時波紋はつくつても、その石だけが沈んで、流れは元のままの流れにかへつて行くのと同樣に、いつまでも現在の退屈さを特色として行くことであらう。「まことに芽出度う候ひける」といふわけである。（昭和十二年）

『國民文學』はごうなる

由來この結社の行き方は地味一方であつたゝ その總支配人に松村英一が扣へてゐながら、あまり花々しい時代もなければ、沈靜し切つた硬化症狀をも見せないで、手硬く、鈍重といふ方ではなくとも、少くとも輕跳と云つた風ではなかつた。惡く謂へば硬軟清濁輕重のごれでもない鵺的結社であり、よく云へば、時代の傾向につかずはなれずの、要領のよさを見せて推移して來たやうである。

これはオン大空穗の人柄をさながらにあらはして居るとも云へ、その作風をそのままに物語つてゐるものとも云へ、その作風の、時に間の拔けたもののありながら、又オツソロしく手堅い詠みぶりを見せて、案外な人氣を博してゐるのにふさはしいとも謂へる。

藝術家五分、學者五分のオン大と、藝術家四分、商賣人六分の支配人とのコンビに、案外破綻を見ずに來たのも不思議と謂へば不思議と言へる。

惜しいことは、此二人以外に、際立つて目につく同人も居ない。それがまたこの結社に無事な今日を惠んだと謂へないこともない。

細胞分裂らしい現象も屢々見てゐながら、全然對立し切らずに、どこかに連繫を

保つてゐて、本店支店の關係を出なかつたといふのも、さうした處に原因するのかも知れない

個人個人の作品に就ても、あまり目立つやうな存在を感じさせず、松村以外には相當の專門學を擁する學者が居ながら、花々しい研究も論說も見せず、頗るオトナしく構へてゐるのが、一般から反目せられず、消極的な好感を寄せられてゐる原因となつてゐると、謂へないこともない。

それでゐて、松村が歌人協會を積極的に牛耳つてゐるかに見える事は、これも不思議と云へば、不思議であるかの感なきにしもあらずだが、又世渡りの要領なごといふものは、さうしたものであることを、敎へて餘蘊なからしめてゐるとも謂へるかもしれない。

只近頃、同人としては左程重要な位置にゐるとも思へない谷鼎が、例の、「花も紅葉も」で執拗に茂吉に喰ひ下つたのは、此社としては珍らしい部類に屬し、それがよき結果を結社の上に齎したか否やは別問題として、少しばかり、世の目を引いたやうであるが、若いだけに茂吉ほごの押しと、アクごさに缺けてゐた爲めに、議論としては有利な立場に立つてゐたが、結果に於て茂吉に押し切られた形で終つたのは同情してやつてもいい。

さうした場合に、社中が擧つて應援してネバらせなかつたのも、この結社らしい處であらう。

ひところ、突如『短歌雜誌』に暴れ出して、所謂おレキレキの作品を俎上に載せ、彼等の心膽を寒からしめた、研工不旱事宗耕一郎も、元は此結社の母体十月會の同人であつた。世間ではだから空穗の弟子であると信じてゐたが、不旱本人は、弟子ではなく兄弟分だと稱して讓らなかつた。そして現在の『國民文學』にあきたらぬやうな口吻を洩し、松村と空穗との間に何事をか起さしめようとしたこともあつたやうだが、あきらかな結果を見せずに終つた。さういふ不旱だから、この結社から締め出しを喰つたのも知れない。

これらが、マアマアこの結社の異狀風景の点出ともいふべきで、それ以外には現在の處、恐らくは近き將來に於ても、何の變もあらはれず、終始する事であらう。

（昭和十二年）

よそのこゝ

……僕が、從來××協會に對してもつてゐた多少の不滿は、それが頭だけの會のやうだといふ事だつた。頭だけの會では仕方がない。それでは却つてややもすれば、下のものに對して、自分達の特權を守る機關になつて了ふ。かういふ小組合の類がつくられるとすれば、ほかの目的は別として、資本家に對して業務者

が全体として、自分達の利益を擁護すべき筈なのに、頭だけの會では、業務者の上と下とでお互に爭ふ危險をつくる。こん度×××が加つたのは、これまでの×協會の、この点の欠点を補ふことになるので、大へん結構である……（報知）

これはヨソの協會の事を云つてゐるのである。大日本歌人協會に對しても、これをいひ得る者の出て來るのは何時のことか。

ここでは、頭だけの會をつくりたがつて居り、頭だと信じたいものばかりが、その他のものを尻つぼばかりだと信じたがり、守るべき特權をつくらうとして、お互ひにではなく、一方的に他を虐げようとしてゐる。

そして、それに對して堂々と反擊するほゞの氣慨のある者は一人も居らず、オベンチヤラを云つて、その末席に加へて貰ひたがつてゐるものばかりが多いのである。

イヤハヤである。カツポレである。（昭和十二年）

座禪の講習會

名古屋歌談會といふ樣なものが二三年前まであつた、いまの名古屋歌話會の前身といへぬことも無い。キザなエラソウな顏のしたい連中ばかりの集合、時々五十錢の定食にありつき、安料理屋の女中相手にイバリ散らす位より何事もなし得ない鳥なき里の蝙蝠連中、名物男オヤトク先生でも來名すると會員は擧つて歡迎の宴を張る。申すまでもなく會費は金五十錢を超過すること不許、お酒は自辨といふ內規、死んだ奧嶋なぞエライ樣の方、万年世話人春日井先生、一同氣をツケ！から初まつて、料理屋の女中ですら呆れ返る樣な場面百出、唄一つうたふでなく、終電車のギリギリまで、まるきり座禪の講習會へ行つた樣な珍風景だつたさうだ。（昭和九年「歐壇風景」所載）

佐渡の殿樣

佐渡の殿樣で有名な渡邊湖畔、歌のうまい事はすでに定評あり、彼れと明星投書家時代の同輩、橋田東聲におだてられて『覇王樹』の同人になつた。これは別に『覇王樹』のみでは勿論ないが歌なんかごうでもよい、お金の出さうなボンクラは直ちに幹部同人に祭りあげられる世の中、彼れ湖畔を俎上の魚よろしく、お刺身に、塩燒にと献立表は出來たが、さて肝心の御本人、イバルにはイバルが意外のケチンボウに驚いた東聲とその一黨の面々、鳩首協議の結果、尙一層彼氏の御機嫌をとるに如かずと、彼れが上京と退京には必ず在京同人は禮服着用の上、驛頭に送迎する

事に一決、東聲沒後と雖もこれを實行すること幾星霜、彼れいよいよ得意の絶頂にあるものの如く、『覇王樹』の基礎愈々豆腐より固し。（昭和九年「歌壇風景」所載）

歌人動物園

かんがる―のやうな晶子が、數多の子をかたはらに、一日の補乳に疲れた體を青白い夜燈のかげに投げ出し、ほのかににほふ初戀人のやわらかい血の色を想起したとき――

寛の心は、あの狼のやうに痩せた頰骨に、物凄いやうな笑を浮べて、肥えた肉の響と、金貨の音樂とをしたひながら自分をごうかして行きさうな時代の力を心から呪つた。

温柔な水牛のやうな薫園は、深い自然の奥から流れ出る、新鮮な緑の水を靜に口に含むでは心よげに四方へ撒き散らしてゐる。そして時折、狡猾な狼の悪戯を憤るやうに、力強く霧のやうに淡水を空へ吹いた。

大久保の奥に新しい巣を作つた、とかげのやうな夕暮は、その新しい巣と、新しい獲物とを護つて、心よげに陰鬱に輝いた背を日光に干してたのしむでゐる。

生れ乍ら獨身者のやうな海龜に似た牧水は華麗な都市の壓迫――若い男女連れの壓迫を避けやうとして、海へ走つた。海、そこには矢張り若い群が樂しさうに飛び歩いてゐた、ア、海はモウ自分の故郷ぢやない、酒！酒！かうつぶやいて酒樽をのぞいた。樽の底には自分の顔が自らあはれむやうに淋しく寫つてゐた。

ぢらふのやうな勇は、何物の壓迫も感ぜぬやうに、その細長い瀟洒な頸をば驕りかにしばしば嬌斜の巷をねり歩いた、酒と白粉これは自分の歡樂を表象した凡てだと考へた。京都――三榮かう考へて彼れは病床で寢返りした。

熊のやうな白秋は、その愛らしい眼を見張り鼻をうごめかして、たえず黄に熟れた果物の匂と、甘く輝いた花粉の匂をたづねてゐた。そして酸い果物の刺戟が心よく彼の味覺を亢奮さす度に、彼の眼は醉ふやうに瞬きして、みごりの空を仰いだ、限りなく澄むだ空には、かすかなる音樂の微動が風につれて流れてゐた。（明治四十三年「八少女」所載）

似たもの夫婦

過般その郎黨と共に歌人協會を脱退して、ウツブンを晴らして××××先生、近時もつぱらすぐれず、名古屋地方のカジンにも敬遠されて、十月淋しく東京へ歸

つたが、これと反比例して妻君×子女史の若返りは、最近もつともの凄く、ことにその錢湯における美顏の資料十種以上に及ぶとて、近憐の婦女子のシンタンを寒からしめ、長男某とは姉弟の樣だ、との井戸端會議の評判であつた。然るに折しもあれ、今夏×子女史は、その奉職する小學校の兒童と共に、××海岸に赴いたのであるが、そこにはその小學校の校長先生もをられたのであつた。而してスキートネスな幾日かは夢の如くに過ぎさつたのであるが、やがてそれはあまりにも無粹な某市會議員によつて、×會に於けるお土產的質問とはなつたのであつた。——さもあらばあれ、かの歌壇きつての有名な毒舌家を以て鳴る豪放な彼れの心境や如何、秋風そぞろに寒く、先生を識るもの、豈淚なくして得べけんや。門弟諸公以て如何となす。（昭和八年）

役德ゴ兩人

大阪中央放送局の安部忠三と、名古屋松阪屋の藤居敎惠のゴ兩人は、職業から惠まれて歌壇的大人物となつた。

安部は氣前よく押賣放送に來るデモ歌人をあしらつては頭を下げさせ、藤居は六歌撰展から三十六歌撰展で、松阪屋を一枚看板に歌壇人から阿彌陀如來の如き存在となつた。

ことに藤居は六歌撰展の成績がよく本社賞はいただく。人選といふ名目に御馳走にありつくジヤーナリスト連は、アチラからもお歌を、コチラからも先生お歌を下さいと來るので、ゴ本人、オレの歌も日本的になつたかナ——位の御見識とは、オダテられても惡口をきくよりはいいでしようとは目出度し。（昭和十一年）

北原白秋ミラツパ節

明治三十七八年の日露戰爭當時から後數年は、戰勝國日本で所謂戰爭物時代であつた。御多分にもれず、否むしろその急先鋒としていろ〳〵な流行唄があつた。そのうちでも「ラツパ節」なるものは凄しい勢で流行したものである。その歌詞は澤山あるが代表的なものは、

『たふれし戰友抱き起し
耳に口あて名を呼べば
ニツコと笑うて目になみだ
萬歲唱ふも口のうち』

流行激甚につれ下劣なる替歌も盛んに出來た。名古屋から發行されてゐた短歌雜

誌『八少女』第二卷第一號（明治四十二年一月一日發行）に發表された北原白秋の詩數篇のうち左の一篇がある、題は「空に眞赤な」で、

『空に眞赤な雲のいろ
　玻璃に眞赤な酒のいろ
　なんでこの身が悲しかろ
　空に眞赤な雲のいろ』

といふので丁度ラッパ節の歌詞としては御誂向である。マサカ白秋もラッパ節のつもりで作られたものでもあるまい。申すまでもなく當時の詩はこのやうな調子が一つの傾向であつて、この詩のみが所謂ラッパ節に御誂向といふ譯では勿論ない。

第一期『明星』が癈刊後、所謂新詩社系によつて發行されてゐた雜誌『スバル』の連中がやつてゐた「パンの會」の席上でこの詩を盛んにラッパ節で唄ふので、白秋大いに悄氣返つて居たさうである。

またその年の八月名古屋市で地方歌人大會を開いたことがある、これに出席した故若山牧水なども醉うてはこの詩をラッパ節で盛んに唄つたものであつた。（昭和十年「短歌新聞」所載）

短歌新聞と歌壇新報

歌壇にも『新聞』と名のつてゐるものが、二種ある。『短歌新聞』と『歌壇新報』とがそれである。

ところが兩種共、新聞紙法に依らず、出版法に依つてゐるのだらうから、本當は雜誌なのであらう。若し、さうでなくて新聞であるなら、ああ「學術技藝に關する記事」ばかりでなく、もつとイキイキとしたニュースや、評論がフンダンに盛られさうである。

まつたく、といつても『短歌新聞』の方は、柳田が、たとへ草深い山陰の田舍であつても、日刊新聞に兎も角席を置いたこともあるといふだけに、『歌壇新報』に比べれば、まだまだ新聞らしい筆鋒をちよいちよい見せてはゐるが、『歌壇新報』の方は、ほとんど閑文字の並列で、トント短歌雜誌の域を一歩も踏み出せずにゐる。

「ニュース」に至つては、ホンの「新聞」と名のる爲めの申譯に、チョッピリ。この点所謂「通信網」と稱するだけあつて、『短歌新聞』の方は、比べものにならぬほどの豐富さを持つてゐる。――だが惜しいことに、大部分は、謂ふ處の通信員の自家廣告に利用されてゐるのは餘り見つともよくない。それがワカらぬ柳田でも

ない筈であり、また事實、「なるべく自己中心にならぬ樣に」と常に通信員達を警めてゐながら、遂にごうにもならないといふのは、ケダシ、月給を支拂はず、ごころか却つて皆後援者、助力者として庇護をうけてゐるであらうからに違ひない。

それに、中央のニュースと云つても、何人がごこへ行つた、ごこへ轉居したといふ程度に止つて、もつと深刻な問題、一例を云へば平野正雄が、その『短歌個展』で書き立てたやうな事件になると、ごうしようもないといふテイタラクである。平野正雄がああアカラさまに暴露戰術に出た以上、柳田たるもの、その事實を知つてゐれば、それを書かない理由をもつと具体的に言明すべきであるし、その事實を知らなかつたのならば、その眞相の闡明に努力して、調停に出る必要はなくとも、歌壇のトピックとして報道の任を完うすべきであつた。

この点『歌壇新報』と雖も同樣である。新報では數行であつたか、十數行であつたか、さういふ事件に對して容喙する義務も權利もないといふことを謂つて、婉曲に營業政策上不利益であるといふことを白狀して了つた。

『短歌新聞』はそれを謂はずに、默殺して了つたのは、黑人のズルさである。ところが『短歌新聞』も『歌壇新報』も、こといやしくも、對手の『歌壇新報』『短歌新聞』に關係があることだといへば、必ず一言でもワル口を云はねば承知が出來ないらしいのは面白い。

これだけは、お互ひに新聞らしい貫錄を見せてゐると云へる。

といふのは、由來、最も文化的事業と自ら誇りもすれば、世間にも信ぜられてゐる新聞ほど、「商賣敵」といふ封建的な思想を露骨に見せて、競爭意識を湧き立たせるものはないからである。大は『大朝』『大毎』をはじめ、小は片田舍の平版二頁新聞に至るまで、一ケ所に二つの新聞が並立してゐさへすれば、お互に、「貴重なる紙面」を常に云云してゐるその紙面の大半を割いても、對手の新聞の惡口をいふ爲めには惜しまないといふのが通り相場だからである。

そんな点だけが、新聞としての体面を持續してゐると謂へば、柳田も尾崎もサゾ柳眉や、ゲヂ〳〵眉を決するかも知れないが、ごうも止むを得ない。

だから「尾崎や、頴田島のワル口や行狀を知ることに興味を持つなら、何よりも先づ『短歌新聞』を、柳田のそれを聞くのがおもしろければ『歌壇新報』を見ることだ」と、何人やらが云つてゐたのは、およそ、カウケイを得てゐると謂へる。

その『短歌新聞』に出てゐなかつた、尾崎に關することとを云へば、孝子女史の心臟の强さといふことである。これは可なり有名な事實らしいが、對手の『短歌新聞』に出ない以上、勿論、自分の處の『歌壇新報』に書く筈もないから、その實際を見せつけられない地方の歌壇人などは御存知のないのが當然である。

かういふ機關としても、この『歌壇風聞記』は、その刊行價値を强調していいわ

けである。

昭和十一年の秋、歌壇新報社主催、短歌講演會といふのが丸ノ内蠶糸會館で催された。講師は勿論、北原白秋、前田夕暮、吉植庄亮、以下ヅラりと十數人の名が並べられた。余興に石井漠の娘とか姪とかの童謠踊があるといふのである。

さて聽衆は、ウソを云へば滿員、ホントウを云へば階下滿員、階上七分通りといふ盛況である。

處がナント、諸君、定刻の六時が來ても、七時を打つても、講師は一人も出て來ない、八時にナンナンとする頃吉植庄亮がペロペロに醉ひ拂つてやつて來た。ペロペロに醉ては講演などは及びもつかない。またそこへ、宇都野研がノソリと、あのロウソクのやうな身を運んで來たので、早速演題に立たせられたが、これも少しはおミキが廻つてゐたと見えて、講演ではなく、僅に、吉植の醉態の披露と、尾崎の心臓のつよいといふことだけを、二三分しやべつただけで、降壇してしまつた。

これはその宇都野爺さんの話である。

「尾崎女史は心臓がつよい。何時ぞや來訪、その後電話がかかつた相だが、その時も不在、處がその次ぎの『歌壇新報』にはチヤント、講演會の講師の中へ僕の名が出てゐた。恐らく、他の講師諸君も同樣でないかと思ひます。」（昭和十一年）

自第一號至第八號

第一號　岡　夕風
第二號　安成二郎
第三號　若山牧水
第四號　花岡桃崖
第五號　尾崎楓水
第六號　百田楓花
第七號　山上夜雨
第八號　高原弦太郎

これは矢澤孝子にきいて下さい。（昭和十年）

山椒太夫の望遠鏡

農民歌人といふと、第一番に指は吉植庄亮に屈せられるわけだが、代議士に政友會から出る位だから、マンザラ水呑百姓ではなからうとは、何人しも直ぐ感じるに

違ひない。

まつたく、彼、吉植庄亮は酒呑百姓であるかも知れないが、決して水呑百姓ではない。大地主、大農場主だ、何人かが「吉植庄亮が農民なら、農工銀行の頭取でも農民だ。」と謂つたのも無理ではない。

彼の印幡沼附近の農場は、事實スバラシい大規模なもので、亞米利加式の大農場で、ウソを云へば茫々數萬町歩、そこに働いてゐる農人、これまたウソを云へば數萬人、暗い中から暗くなるまで、彼の鞭に追ひ使はれてゐるのである。

その農場には、ところどころ火の見櫓のやうな望樓がつくられて居り、時々巡視に來たオン大庄亮が、その上に立つて望遠鏡でそれらの農人の勤怠ぶりをカン視するのである。

そして若し、その望遠鏡を通じて、一寸一服地面に坐つて、ナタ豆煙管でプカプカとやつたり、寢轉んでゐる姿が見つけ出されやうものなら、庄亮の命令一下カン督といふ赤鬼や青鬼が、自轉車で飛んで來て、百罵萬罵、お目玉を頂戴するで、農人たちは彼を呼ぶのに。今様山椒太夫を以てしてゐるといふことだ。

彼が東京へ出て來ると、歌壇のダレカレを引きつれて、バアからカフエーを泳ぎ廻り、お大盡お大盡で、數日間行方不明となることしばしばであるさうな。

だから庄亮は農民歌人でなくて、呑歌人だと、これは東京での話。（昭和十二年）

風呂の中

『歌壇風景』で、柳田新太郎如きと書いたのが、餘程お氣に召さなかつたと見えて、程なく名古屋へやつて來た新太郎、あとがウルサイといふので、ともかくある安料亭で、少數の人達で歡迎會が催された。

驛までお出迎への某と共に、會場で來會者を待つ間、一風呂浴びることになつた新太郎と某、風呂の中で、「あの記事は一体誰れが書いた。」と追窮甚だ急で困つたといふことである。書いたのは親類筋に違ひなからうといふ見當はつけてゐたものの、聰明な某も神様でない限りそれを知る筈もなく、ごんな返事をしたかは聞きもらしたが、いやしくも昔は、日本歌壇のムツソリーニを自任してゐた新太郎にしては見え透いた小人振りの態度であつたといふ話であつた。（昭和十一年）

記事檢閲係

名古屋から發行されてゐる歌誌のうち『短歌陣』とかいふのがある。騒ぎ立てる程のものでは勿論無いが、この雜誌の特色は、一々鷲野飛燕といふお爺さんが檢閲

をしてからでないと發表をさせないといふ最もイカメシイ支配と監督のもとに發行されてゐるのであるといつてもいい。

いひかへれば、一言一句、ことごとく鷲野飛燕の全責任といふことにもなるが、その最も露骨な證據は同誌五月號の卷頭文の伏字は全部飛燕の意中に出たものであるとか。（昭和十二年）

親子・夫婦・兄弟

親子歌人（――は故人）

與謝野尙綱（八木立禮門）――與謝野寛（明星、冬柏）

佐佐木弘綱（足代弘綱門）―┬佐佐木信綱（心の花）――佐佐木治綱（心の花）
　　└印東昌綱（心の花）

石榑千亦（心の花）――石榑茂（元、心の花）

齋藤瀏（心の花）――齋藤史（日本歌人）

服部躬治（あまひこ）――服部直人（水甕）

島木赤彦（アララギ）―┬久保田初瀬（アララギ）
久保田不二子（アララギ）―┘

鈴木久子（ボトナム）――道久良（ボトナム）（養子）

夫婦歌人（――は故人）

與謝野寛（明星、冬柏）―與謝野晶子（明星、冬柏）　茅野蕭々（明星）―茅野雅子（明星）

若山牧水（創作）―若山喜志子（創作）　太田水穂（潮音）―四賀光子（潮音）

島木赤彦（アララギ）―久保田不二子（アララギ）　前田夕暮（詩歌）―狹山信乃（詩歌）

日比野道男（曼陀羅）―日比野友子（水甕）　生田蝶介（吾妹）―羽田珠子（吾妹）

鷲野飛燕（創作）―鷲野和歌子（創作）　上田英夫（水甕）―上田よしの（水甕）

西出朝風（純正詩社）―西出うつ木（純正詩社）　田邊駿一（元プロ短歌）―田邊一子（元プロ短歌）

安田青風（水甕）―安田佐和乃（水甕）　長谷川銀作（創作）―長谷川ゆりえ（創作）

三苫守西（創作）―三苫京子（創作）　岡島寛一（水甕）―千々岩賤惠（水甕）

平野實紀（ボトナム）―白木淑（ボトナム）　阿部鳩雨（草炎）―阿部千鶴子（草炎）

石榑茂（元、心の花）―五島美代子（心の花）　奥村奥右工門（水甕）―奥村さき（水甕）

橋田東聲（霸王樹）―橋田あさ子（霸王樹）　兒山信一（水甕）―江崎浪子（水甕）

佐佐木信綱（心の花）― 印東昌綱（心の花）　兒山信一（水甕）― 兒山敬一（着歌表現）
須藤泰一郎（覇王樹、アララギ）― 藤岡林城（水甕、草炎）　金澤種美（水甕）― 大村吳樓（アララギ）　大悟法利雄（創作）― 大悟法進（創作）　乾林莊（草炎）― 阿部千鶴子（草炎）　豊島烈（國民文學）― 豊島晃（美穂）　高橋俊人（菁藻）― 高橋希人（創作）
野澤柿葺（潮音）― 彦阪ちよ子（潮音）

自費出版歌集の末路

歌集は何時だれがそんな悪例をつくたものか、そのほとんどが自費出版である。

オソラクは、若山牧水の『海の聲』あたりが元祖ではないかと思ふ。勿論これはヤツガレの當て推量であるが、賣込み原稿ではなかつた筈である。

もつとも『海の聲』以後にも、稿料を受け取つたものがないわけでは無い。例へば、啄木の『悲しき玩具』は二十圓で東雲堂が引き取つた筈だし、改造社から出たものの多くも稿料を拂はれてゐるだらうと思へる。だがここでは、自費出版歌集のことに就いて書くのが目的だ。

ソモソモ……と四角張る必要もなささうであるが、自費出版の歌集は大抵三百部が多く、たまには五百部刷るものがあるかも知れないが、二百、百といふのもある筈だ。

中には、わざわざ部數の少いことを見えにするかの如く裝ふ爲めに、「限定版」などと唱へて、一々番號をつけたりする見え坊もあるが、むしろ、その見え坊であることを廣告してゐるやうでをかしい位のものである。

三百部刷ると一寸かういふ計算になる。四六判、一頁二首組、三百頁

組代（一頁五十錢三百頁）	一五〇、〇〇
紙代（三百部九萬頁、一枚三十二頁、總計約二八一三枚、一連二十圓としてヤレを見て六連弱）	一二〇、二〇
刷代（一頁一毛として、三百部九萬頁）	九、〇〇
表紙（紙裝一部五錢として）	一五、〇〇
製本（一部三錢として）	九、〇〇
箱代（一個三錢として）	九、〇〇
合計	三一二、〇〇

外に表紙畫、金文字等の製版代。尙製本代は多少減、箱代は多少の增を見るかも知れない。

右の様にして概要三百五十圓とすれば、一部約一圓二十錢見當となる、そして定

價は先づ一圓五十錢から二圓といふ處であらうが、一圓五十錢としてみんな賣れれば四百五十圓となり、差引百圓の利益となる勘定であるが、それは全部賣つての話であり實際にはさうウマク問屋がオロさない。中堅處の某氏の場合を引き合ひにすると、友人や先輩、雜誌社などへ乞高評の爲めに無代寄贈が約五十部、實際に賣れたのが百部、この中、本屋の手を經たもの、二十部は二割引の一圓二十錢しか入手が出來なかつたから、總計入金は一二〇圓プラス一四四圓だつた相であるが、更にコマカク無代寄贈の送料十錢づつ計金五圓をマイナスすれば一三九圓となる。それを印刷屋へ拂つた三百五十圓からマイナスすれば二百十一圓の損失となるわけだが、その後某氏は、數年間に約三十部を賣つた相である、その二百十一圓から更に十五圓を引いた百六十五圓が、今日までの損失であり、書物が後に百二十部殘つてゐるのを賣切ると、百八十圓で二十四圓のこる筈であるが、反對に之を古本屋へ賣ると、なると、まづよく買つて一冊三十錢の三十六圓、百六十五圓から三十六圓の、結局百二十圓の腹切といふ譯である。

だが諸君、これを標準にして、おれも一つなごと野心をおこす樣な不心得者はないにしても、これだけの損失で濟んだのは、某氏だからであるといふことを忘れては困る。現在相當のファンを持つてゐる某氏だからそれだけ賣れたのである。一つの結社の新進、中堅といふだけのものや、緣故情實で同人だ、幹部だと威張つてゐても、他の結社の人々にはその名も知られてゐない樣なものの歌集を何人が買ふものかである。

事實、その某氏と同じ結社の同人の歌集が、ナント只の一部も賣れなかつたといふ。これはほんとうの話で、おそらく大部分はこの調子であらう。もし諸君が、歌集を自費出版しようといふのなら、三百か五百の金をブタに喰はせるつもりでなければならないといふ結論が生れて來る譯である。更にもし、三百部のうち三十部を寄贈した殘りの二百七十部は、子か孫か、曾孫の代に、それもその著者がごうやら歌人らしい取扱をうける樣になつて、さて十年に一冊、二十年に一冊が稀覯品として、骨董品扱されればまだいい方である。（昭和十　年）

大臣病患者

かつて『歌壇風景』に名古屋短歌會內閣といふものを發表したことがある。これについて、怒氣滿面、ドナリ込んだ大臣が一人、ナゼオレを總理大臣にしてくれぬといふのである。よろこんで來た大臣二人、なぜオレを入閣さしてくれぬと泣言をいつて來たのが一人あつた。おもしろいではないか、こんなところにも大臣病患者がある。（昭和十年）

短詩界一覽表

横綱	與謝野鐵幹		
横綱	與謝野晶子	前頭	増田雅子
大關		同	高村碎雨
關脇	尾上柴舟	同	吉井勇
小結	丸岡月の桂のや	同	川上櫻翠
前頭	渡邊光風	同	土岐湖友
前頭	水野葉舟	同	三木露風
		同	玉野花子
大關	窪田うつぼ	前頭	山川登美子
關脇	金子薫園	同	櫻井星外
小結	毛呂清春	同	前田夕暮
前頭	相馬御風	同	前田翠溪
前頭	平野萬里	同	平井晩村
		同	正富汪洋
		同	小林花子
前頭	田波御白	前頭	佐瀬蘭舟
同	秋庭露花	同	野口安
同	有本芳水	同	若山牧水
同	武山英子	同	原田輝子
同	内藤晨露	同	植松寂寥
同	岡稲里	同	竹村篁
同	宗耕一	同	寺本道子
横綱	服部躬治		

（明治三十九年「山鳩」所載）

記念品を贈呈するの會

棚橋古刀雄が『短歌』の發行所の世話を辭めることになつたので、友情にあつい春日井濱等が發起となつて、隨分アチコチと依頼狀を刷つて配つた。お蔭で金壹百七十四圓五十錢を集め金壹百五十圓を記念品資金といふ六ケ敷しい名義で贈呈されたのは何樣結構なことで、春日井濱等の努力は後世の美談として忘れてはならないことだと感ずるであらう。

ところが又々前田源が發行所の世話をやめるといふことになつた以上、ヤハリ前田には前田だけの勞に酬ゆるのが至當であるが、トント音沙汰がなかつた。

しかし、世間にはそれぞれその樣な考のある少數の人もあつたと見えて、最近棚橋の時と同じやうな刷物が、配布された。

棚橋の時もさうであつたが、資金募集から會計報告に至るまで、發表さるべき筈の『短歌』誌上に一行のその記事さへないので、よくたづねて見る、アレは誌上で發表する性質のものでないといふのであつた。これをきいて驚いた某、誌上で發表する性質のものでないかごうかといふ問題は別として、それが紙上で發表する性質のものでないとしたら、我々の方面まで刷物を配るほごのことでもないではない

か。そして僕も出すほどのことではないぢやないかといつてゐた人もあつた。

ことにこれ等の事情を發表するに適當な機關を持ち乍ら、ワザワザ印刷に附した刷物を配る等、お金の無心をいふ以上、一厘なりとも經費の入らぬ樣心掛くべき筈のものであるとおもふ。しかるに誌上で發表する性質のものでないといふこの邊の事情は一体ごんな理由に基くものかはしらぬが、歌會などで文字の間違ひ、（たとへそれが誤植であつても）ばかり探し出して悅に入つてゐる樣なセンセイ歌人でなくては解せられぬといつてゐた人もあつた。

ところが、この印刷物は五月に配布され、寄贈金の〆切が六月十日といふことになつてゐる、しかるに九月の初めになつてもこの會の結末がついてゐないので、心ある者は實行委員の怠慢を憤つてゐたが最もの次第だ。

この會の發起人は三田澪人ほか二十名、このうち實行委員が三田澪人ほか七名、きくところによると、所謂實行委員のうちにさへまだ寄附行爲の表示がない人があるといふので、遷延してゐるのださうだから驚かざるを得ない、しかしいくら實行委員でもこれは寄附であるから、志がなくば强要する性質のものではないが、眞面目な人々の非難の話題となるのも當然である。（昭和十二年）

門人募集

岐阜からヒヨツコリ來名してヒヨツコリと歸京した尾山篤二郎、歌ヨミと生活問題といふ樣な話にふれて曰く、北原白秋は一ケ月五百金を要し、俺だつて二百金は要る、そう易易と原稿がお金になるものではないから、ごうかしてお金持ちの女門人を十名ばかり早急に作つて生活の安定がしたいといつてゐたさうである。ごうしたつて野郎では汁氣が無い、後家でも若ければ辛棒しなければならぬといつてゐたかごうか、最近歌集を出した某御後室樣はその走りでは無いかといつてゐた人がある。（昭和十二年）

これでも會員

會員詮衡もヘチマもあつたものではない、一々その實例を引ッ張り出すの繁に堪へないが、イヤシクも大日本歌人協會員である以上、假名遣や語法位を知らぬといふのは驚く。間違ひだらけの歌が平氣で發表されてゐるのには呆れて物が言へない。たまには誤植もあらうが、斷じて誤植と認めがたいものが澤山ある。

それでも學校の先生は商賣柄さうでもないやうだが、涙の出る樣な心細い會員があるのには、まつたく泣き出したくなる。

今度また第二次會員が百四十何名とか決定したそうだ。ヤレヤレ。

大日本歌人協會のお役人は、新會員には必ず辭書と文典とを配布することを協議せよ。（昭和十二年）

系統・結社轉々調

米倉章五　明星―詩歌―自然―吾妹―曼陀羅―香蘭―青虹
森園豊吉　創作―車前草―珊瑚礁―日光―あしかび―あさひこ
西村陽吉　創作―生活と藝術―
尾山篤二郎　明星―創作―詩歌―朱欒―異端―日光―自然―曼陀羅
杉浦翠子　アララギ―香蘭―短歌至上主義
岡野直七郎　詩歌―水甕―蒼穹
岡山巖　水甕―歌と觀照―多磨
　　歌と觀照
　　青海波―曼陀羅
　　自然
　　自然

小泉苳三　車前草―水甕―ボトナム―橄欖―ボトナム
水町京子　車前草―水甕―珊瑚礁―草の實―遠つひと
　　多磨
矢澤孝子　明星―創作―自然―あけび―阿迦雲
大脇月甫　吾妹―水甕―青虹
高安やす子　明星―アララギ
　　まだある。（昭和十二年）

小栗風葉と和歌

小說家小栗風葉、年壯上京、佐佐木信綱の門に入つて國文學の講義をきく、ところが男は風葉一人、他は綺羅を粧うた淑女のみ、流石の風葉もその靜肅と窮屈に辛棒が出來ず、聽講半ばにして逃げだしたといふ話がある。

その後風葉、何を感じたのか和歌創作を試み、大いに新思想を氣取り、得意になつて佐佐木信綱に見せてその斧正を求めた。ところが信綱見ること一再、苦心の和歌も眞つ赤に塗抹されて、殆んどその原形を認めざるに至つたので、これを見た風葉、頗る不平やるところを知らず今後は斷じて和歌に筆を執らないといつたといふことである。（明治三十四年）

張出　横綱　尾山篤二郎

東　關		西　關	
横綱　三井甲之	前頭　金澤種美	横綱　宗不旱	前頭　杉野朴
大關　齋藤茂吉	同　矢代東村	大關　花田比露思	同　楠田敏郎
關脇　太田水穗	同　米倉章五	關脇　前川佐美雄	同　井上雪下
小結　土屋文明	同　兒山敬一	小結　日比修平	同　安部忠三
前頭　杉浦翠子	同　渡邊順三	前頭　大熊信行	同　村上新太郎
	同　矢島歡一		同　阪口保
	前頭　清水信		前頭　飯田兼二郎
	同　由利貞三		同　高草木暮風
	同　小川水明		同　村田薫吉
	同　加藤克巳		同　六車勇
	同　石川信雄		同　富谷三郎
	同　逗子八郎		同　中井コッフ
	同　高橋喜惣勝		同　中島哀浪
	同　中村正爾		同　草丘之助

蒙御免

年寄　柳田新太郎　大悟法利雄　行司　退屈堂主人　勸進元　歌壇風聞記
顔田島一二郎　本美鐵三

（ごうも關西は少いやうだ）

社友搜奪

『國民文學』の藤居敎惠曰く、いくらうまくなつたつて『短歌』なんぞにゐたら、三田澪人か淺野保位までである。と相當皮肉な言葉で社友搜奪戰が展開されてゐるそうだ。

かりに金出し同人に祭られるなら、田舍の一小弱誌より、押しも押されもせぬ日本の一流雜誌で無くては嘘だ。論より証據オレを見よとまでいつたかごうかは知らぬが、とにかく可成り突込んだ言葉を以て社友勸誘につとめられてゐるとは。

さて、さて、名古屋の夏も暑いことだ。（昭和十一年）

やぶにらみ・さつしのすりだか

アララギ	一、六〇〇
水甕	一、四〇〇
冬柏	八〇〇
心の花	八〇〇

多磨	七〇〇
國民文學	五〇〇
潮音	五〇〇
創作	四〇〇
詩歌	四〇〇
日本歌人	三〇〇
吾妹	三〇〇
青虹	三〇〇
歌と觀照	三〇〇
ボトナム	三〇〇
蒼穹	二〇〇
其他	二〇〇 以下

（昭和十二年）

損が立つ

名古屋短歌會の、金出し同人の同人費と、毎月彼等がクダラヌものを書いて、誌面を埋めてゐる經費の計算をして見ると、ザット左の勘定となる。いくら下へもおかぬ大切な金出し同人でも勘定すれば損が立つ。これから詳細なる數字について說明する。

青木穠子

一月號	散文	八頁	短歌	四首 六行
二月號	同	六頁	同	九首 十一行
三月號	同	四頁	同	六首 八行
四月號	同	五頁	同	十首 十三行
五月號	同	四頁	同	九首 十一行
六月號	同	五頁	同	九首 十一行
七月號	同	六頁	同	十首 十三行
八月號	同	五頁	同	十首 十三行
合計		四十三頁と二段ヌキ八十六行		

清水芹畝

	散文	—	短歌	九首 十二行
	同	一頁	同	七首 九行
	同	一頁	同	十首 十二行
	同	一頁	同	五首 七行
	同	一頁	同	七首 十行
	同	一頁	同	十四首 十七行
	同	一頁	同	十首 十二行
	同	一頁	同	八首 十一行
	合計	七頁と二段ヌキ九十行		

以上が本年一月から八月まで、二人がそれぞれ『短歌』の誌面を使つてゐる。しかして彼等は幾何の同人費を負擔してゐるか、『短歌』は毎月一頁當り幾何の經費を要するかといふ問題を數字にして見ると、金出し同人らしい顏もし又待遇もうけてゐるが、名古屋短歌會としては、決して彼等のお他力を蒙つてゐないからをかしい。

しからばその作品が、それ程の犠牲を拂つてまでも掲載價値のあるものかごうか。世間でも恐らく『短歌』の若い連中が加へてゐる漫罵痛評以上の評判であらう。穠子のものなぞ論ずるまでなく　芹畝の隨筆だつて、毎月同じやうな事ばかり繰返してゐるので、同人のうちですら大低は愛想をつかしてゐるさうである。これが所謂『短歌』の代表的讀物であるときいては心細き次第だ。

さていよいよ收支の決算をお目にかける。まづ『短歌』一頁あたり幾何の經費を要するか、その發行部數まで煎じつめる必要は無いが、一萬部とは發行されてゐないこと丈は確實である。その配布されてゐる大部分が寄贈交換の約壹百部、同人に二部宛、あとが社友が幾人と考へれば筆者の推定するところによれば、まづ郵税其他の諸雜費を除いて、一頁組、刷、紙代で一圓、高くても一圓十五錢は出まい。

收入としては青木穠子は年六十圓（月五圓の割）清水芹畝が年二拾圓（年二回送つてくるので）これで二人の名古屋短歌會へ出した金を收入とする。

青木穠子

收入

四〇、〇〇〇　同人費八ヶ月分（月五圓ノ割）

支出

四九、四五〇　散文四十九頁（一頁一圓十五錢）

四、九四五　歌二段ヌキ八十六行（一行　五、七五）

計　四〇、〇〇〇

清水芹畝

收入

一三、三六〇　同人費八ヶ月分（年二十圓ノ割）

支出

八、〇五〇　散文　七頁（一頁一圓十五錢）

五、一七五　歌二段ヌキ九十行（一行　五、七五）

計　一三、二二五

差引利益　十三錢五厘

計　一三、三六〇

計　五四、三九五

差引欠損　十四圓三十九錢五厘

右の計算では八ヶ月にして青木穠子が十四圓三十九錢五厘の欠損、清水芹畝が十三錢五厘の利益とはなるが、これも郵税其他の諸雜費を見積れば欠損であることは言を俟つまでも無い。しかし同人雜誌である以上、お互にツマラぬものでも平氣で出せるといふ特殊性があるので、作品について文句はいらぬお世話であるが、少くとも昔日の悌のないオンイタワしい昨今の『短歌』を見るにつけ、ゴ兩人に今少し同人費を奮發させなければ嘘だ。ごちらかといへば、あまりオダテ過ぎるのでいけないのである。モウ少しピンとやつてたまには没書のウキ目位を見せたら彼等はあはてて同人費の増額を顧慮するであらう。（昭和十二年）

不遇の渡邊光風

歌壇の一隅に今も渡邊光風といふ老人の存在を知つて居る人があるかも知れぬが、此光風老は今から三十餘年前青年文士の梁山伯「文庫」の歌壇選者として鳴らした時代もあつた、その門下からは澤山の歌人も出た筈だが、ごうしたものか歌壇には頓と其存在を認められない、これは彼の歌が一風變つた漢詩張りの調子で、時代の推移といふことを無視してゐるにもあるが、歌人としてばかり終始せず、いろんな雜誌に下らぬ作品を出して、自重を欲いた結果もあらうが、兎も角歌歴から云ふと、柴舟、薫園、空穗らよりも先輩株で、普通ならば文化勲章か藝術院入級であるのに惜しいことだと言ふものがある。（昭和十二年）

薫園と葩夕、空穗と清美

今春窪田空穗と金子薫園が、相前後して還暦の祝賀會を開いた。イヤ開いたのではなく開いて貰つた。門下生の誰彼は今では舊師を凌ぐ歌壇の大家、師たる御兩所もさぞ得意であらう。

薫園の方の祝賀發起人の一人山田葩夕は、美濃國養老の生れ、三十年前岐阜で小學教員をしてゐる少年時代から大の薫園崇拜者で、あまりの薫園宗に友人だちを呆れさせた位だが、それだけ師匠には可愛がられ、東京中野の電信隊へ入營を機緣として除隊後薫園の世話もあつて上京し、爾來三十餘年、形影相伴ふ師弟の情誼深く『光』の同人として歌壇の一部にある。離合集散常ならざる薄情なる歌壇の師弟間には珍らしい一つの佳話だとも言ひ得る。

次に空穗の門下にやはり岐阜に柴田清美があつた、葩夕と青年時代の親友で、相携へて當時の歌壇に活躍したが、不運にも三十歳前後で此世を去つた。若し生存してゐるならば空穗門下では松村英一、半田良平、植松壽樹、高瀨俊郎などと比肩すべき人物であつた。（昭和十二年）

三木露風の岐阜時代

年輩から言へばまだ五十にはならぬ三木露風、詩壇から置去りを喰つたか、それとも自ら退却したか近年一向振はないが、聊か早熟老成の嘆なき能はずだ。彼は十七八歳の年少時代に早くも歌集『夏姫』を出して、天才の閃きを見せたほどだが、

十八歳の時一ルンペンとなつて岐阜に來て小木曾旭晃の世話で、田舍新聞の記者をやつてゐたが、根が詩人と來てゐるので雜報一つ滿足に書けず、詩ばかり載せても讀者に讀まれず、新聞記者は落第だつたそうな。そんな譯で在社僅かに一ヶ月で上京したが多感な詩人だけに、相當に面白い逸話を旭晃へ置土產にして行つたそうだ。

（昭和十二年）

廣告料で敵討

筆者は誰れであらうと書けといやアンナものなら、一年でも二年でも書くがごうだといつてゐた『歌壇新報』の「大風呂敷の穴から名古屋歌壇を覗く」といふ記事が二ヶ月連載されて、三ヶ月目からバッタリ尻切れトンボとなつた。

これは第二回目が掲載されると、果して名古屋短歌會から歌壇新報の『短歌』の廣告を拒絶すといふキツイ手紙が舞ひ込んださうだ。あの記事については前田源が大立腹であるといふ通信が早川孝あたりから女社長のもとへあつたので女社長內心ビクビクしてゐたかごうかは知らぬが、年はとつてもそこは女だけに氣がやさしい、廣告料といつたところで一ヶ月二圓位のもの新報だつて騷ぐ程の問題では勿論ないが、第三回の原稿は遂に掲載する勇氣なく、その頃ながらく旅行中の筆者の許へ右の條々に悲鳴を交ぜての報告があつたさうだ。女社長曰く「廣告料は知れてゐるが直ちに掲載を中止するのは体裁が悪い故、當分は無料でもイイから出すが、その續稿の掲載は見合せたいといふのである。

ごうせこんなことであらうとはおもつたが、筆者としては出ても出なくてもごうでもよいので棄てておいたさうだ、その後引續き『短歌』の廣告が歌壇新報に掲載されてゐるところを見ると、結局女社長が頭を下げてケリがついたものと想像してもよからう。

しかし一ヶ月二圓ばかりの廣告料を楯にしての敵討は前田源も、相手が女では男を下げたこと夥しいといふ評判であつた。（昭和十年）

短歌の頁

佐佐木信綱、尾上柴舟、窪田空穗諸氏、それに北原白秋、齋藤茂吉兩氏を加へるとすれば太田水穗も入れねばならぬし、まづ與謝野晶子氏と、これで七人と最初の腹案だつたのが改造社發表の『新萬葉集』審査員の顏觸れであつた。そこへ土岐善麿氏、土岐氏を加へれば前田夕暮氏も、もう一人釋迢空氏も入れて貰ひたいといふので發表の時は十人になつてしまつた。が、納まらないのは尾山篤二郎氏を筆頭に

する現役將官級で、冗談いつて貰つては困る、僕等の作品の選をする資格が、あの中で一體誰と誰にあるかといふやうな風が吹いて來て、川田順、土屋文明、半田良平松村英一、吉植庄亮の諸氏に元老株の石榑千亦、金子薫園、岡麓の諸氏、更に相馬御風、花田比露思、吉井勇といふやや異色の諸氏を加へて十二名の評議員が出來上つた。

『新萬葉集』には新短歌作品を含まないといふ建前からアインシュタインで緣故のある山本社長自身が出馬して、既成短歌打倒の一方の旗頭石原純氏をも評議員に、口說き落し、では既成短歌を出しませうと純博士にいはせ、全日本歌壇の壓倒的支持といふ看板で發表された『新萬葉集計畫』であつた。

ここに立場を喪つたのが新短歌の作家の一團である。大日本歌人協會の創立では、會規第五條の傳統云々でK・Oとくるし、それが動機で前田夕暮石原純兩氏が感情的に對立して前田氏は數からいつて新短歌壇の半數を占める『詩歌』一黨を率ゐてサッと退陣した形である上に、この爭ひから煩鎖に堪へぬといふ上手い口實が改造社に取られて締出されてしまつたのだから、ジャンルがごうの、スタイルがかうのと騷いでゐた血氣の連中、俺達を一體ごうしてくれるんだとポカンとしてしまつた。

×

ところが茲に憐をとゞめたのは大日本歌人協會である。ごしごし積極的に歌壇的な仕事をやらう、營利を度外視した後代への諸文獻を我々の手で殘さう、この理想から前協會を解散し新協會が創立されたのだが、この『新萬葉』といふ途方もない大文獻計畫が、協會に何の挨拶もなしに、協會といふ機關を拒否して素通りしてしまつたのである。

審査員には協會常任理事二名、理事二名、名譽會員三名、評議員に理事六名、名譽會員一名といふ協會員の全スタッフ（殘つたのはタッタ理事三名）が動員されてゐながらこれを協會と何等かの意味で結びつけ得られないといふのなら理事諸氏は自ら協會の存在價値を否定し協會改組の精神を蹂躙するものではないか。あれぢや仕事が出來ないからといふ理由で飾ひ落した前人員八十名の前に何のカンバセあつて見える心組であらうか。協會の權威も威信も面目も、自ら踏み潰してよい位の程度の大日本歌人協會なら、潔く泥溝の中へ投込めばよい。五月の春季總會はこの分では面白い光景であらう。云云。（昭和十二年「日本評論」所載）

女ならでは

外の世界と違ふ。歌壇といふ處は。

外の世界では、女はてんやわんや、共同で事ははじめても、口ばかりが達者の、手の方は一向御留守といつた具合で、すぐいざこざを持ち上らせ、出來すよりツブス方が早いと云つたものだが、歌壇ばかりはこの定石から外れて、女ばかりの結社の方が、案外平穏無事のやうであるから不思議である。

『草の實』だけが、創始者水町のお京ちやん（といふと下町のオボコ娘のやうだが、實物はもう五十に間もないといふ、御承知の通りのお婆ちやんである）がオン出たか、オン出されたか、別に『遠つびと』をはじめた以外には、あまりさうしたいさこさは聞かない。

もつとも、女ばかりの結社と云つても、その『草の實』と、中河幹子の『ごぎやう』の外にはなかつたのだから、そのパーセンテージは五〇といふことになつて、必ずしも、しかく平穏無事といふわけには行かないかも知れないにしても、この辻褄は、男ばかりの結社といふものがなく、他のすべてが男女混成ばかりであるので、合し得るかも知れない。

『ごぎやう』系の清水千代が、何かを組織してゐるやうにも見えるが、これはオン出たのでもなければ、オン出されたものでもなく、支店を開設したといふ程度のものであらう。

大阪の矢澤の婆さん（これは本當の婆さん）も、何か雜誌を出すさうであるが、これも元からの御弟子達の機關として出すので、嚴密な意味の結社とは云ひ得ないかも知れない。

女流を主宰として、社友同人は男女を撰ばぬといふのに、與謝野晶子の『冬柏』若山喜志子の『創作』杉浦翠子の『短歌至上主義』望月れい子の『七葉樹』それに今井邦子の『明日香』だが、これは短歌結社といふべきよりは、文藝結社に近く、雜誌に出る作品も、歌壇外の可なり名のある文壇人の作品などを、これ見よがしに、自慢らしく並べてゐる。

或は相當の稿料も支拂つてゐるのかも知れない。歌壇以外には、無報酬で、喜んで書くものは、たとへ對手が女でも、さうざらにあるものではない。殊に『明日香』は千部以上も賣れるといふことだし、邦子のあの如才なさで、お弟子からの報酬だけでも、多少のウソがあるかも知れないにしても、月々五六百圓はあるといふことだから、可なりユックリ原稿料も拂ひ得るわけである。

いつか、尾山篤二郎が『短歌新聞』に一回だつたか二回だつたか廣告して、通信添削の廣告を出したが、十首一圓だか、二圓だかの報酬を稼ぐつもりのが、希望者が三人しかなくて、廣告料（勿論拂ひもしなかつたらうが）だけもとれなかつたといふことであるに對して、邦子が月に六百圓稼ぐといふのは、本たうかも知れないが嘘のやうな氣がしないでも無い。

水町京子の『遠つびと』や清水千代の『ごうだん』は未だ日が淺いので勿論だが、『こぎやう』や『草の實』にしても、決して收支相つぐなつてゐるやうにも思へないにも拘らず、ヘコたれもせず、今日まで刊行をつづけてゐるのは、女の執拗さ、ねばりつよさばかりではなくて、女ならではの心臓のつよさと、女なればこその魅力で、社費以外に喜んで經濟的援助を、思ひがけない處から得てゐるからであるのかも知れない。

さういへば、女の團体になら、喜んでなくとも、しぶしぶであるにしても、敢て援助を惜むまいと思へる、歌壇でのブルジョアに屬する顔の二三が、クローズされて現はれて來るやうな心地もする。

『女ならでは夜のあけぬ國』

ああ、ここでもやつぱり金言であつた。（昭和十二年）

執筆者　太郎冠者
發行者　大名
本人　西の村辰五郎

狂言轉向

シテ　太郎冠者
ツレ　大名
ワキ　西の村辰五郎

ツレ「これはこのあたりのフミ屋で御座る。何がなよき思ひつきをと日夜心にかけ、漸く思ひつきまいたによつて、太郎冠者に命じ『歌壇風聞記』を編ませて御座るが、程なう出來上ることと存ずる、ナレご、彼奴なまけ者の事で御座れば、捨て置いては何時の事とも計られ申さぬ。まづ呼び出いて、キツと責めつけてやらうと存ずる。……ヤイ、ヤイ、太郎冠者あるか。」

シテ「ホウ……。」

ツレ「居たか。」

シテ「オン前に……。」

ツレ「念なう早かつた。オノレを呼び出いたは余の儀ではない。豫て申しつけ置いた『歌壇風聞記』まだ見せぬは、何と致いた。……オノレまたなまけ居つて、毎日ノラクラしてゐたであらう。」

シテ「その事に御座ります。何がさて、歌を詠まうずるほどのやからの事で御座れば、イヤ、モウ、ズント、面白いネタも數多くは御座れご、近頃綜合誌とか何とやら申まいて、足まめに、筆まめ、カキ集めますれば、トントいいこぼれ種も御座りませぬ。なれご、たのうだ御方の御思召も御座れば、何がなよそ人の氣づかぬ大モノをと心掛けて……。」

ツレ「イヤ、言ひわけは聞かぬ。オノレが拾うた特ダネを云へ、早う云へ。」

シテ「サレば申しまする。（振になる）
〽ブローオレタリヤ、ブローオレタリヤ、ブローレタリヤはどこへ行た。
〽消えエた、消えエた。詩に消えた。こそ、こそ、こそ、こそ、消えうせた。
〽戻つた、戻つた、消えのこり、いいつかノコノコ戻つた。
ツレ（何時か共に振になつてゐる、シテに和して、踊る。）
〽神代ながらの三十一文字。三十一文字は古いとて、カタチをきままに崩しても、涸れた泉は湧きも來ず、砂にまみれて、砂にまみれて、おたまじやくしはあるものの、またノソソソと水を戀ひ、みづひとすぢ（三十一文字）に舞ひ戻る。」
シテ、ツレ（顔を見合して）
「ワハハ……。」
ツレ「やい、やい、やい、オノレがオノレが、これが新しいネタとは舌長い。さてはオノレ、踊り誑かさうずる腹黑め。ソコを動くまいぞ。」
シテ「まだそれからが御座りまする。」
ツレ「何と、まだあるか。」
シテ「なかなか。」
ツレ「早う、それを云へ。」

シテ「サレば申しまする。」（振になる）
〽そもそもプーロの親玉は、親玉は、カール・マルクス、エンゲルス。唯物史觀。辯證法。紅毛オロシヤの、紅毛オロシヤのレーニンくにを牛耳つて、先づ赤色にぬりつぶし、世界に及ぼさんとすれば、及ぼさんとすれば、尖端ごのみの二才共、とかくいろには染み易く、このひんがしの日出づる國にも、大和心に匂ふ花の、匂ふさくらの花のいろさへ、オロシヤ、レニンの息吹をふつかけ、血潮の色にけがさんと、マルクス・ボーイのましら共、三十一文字のやからまで、ヤレ定量性、重量感、ソレ自由律、非定型、何のカンのと屁理屈を、こねくり廻せど、何がさて、元より猿のまね、新しがり、心（シン）から深き、思慮の末、思慮の果てのことならねば、飽くより早く行き詰り、またこそこそと定型に、轉向する者なきにしもあらず、ごころかぞくぞく轉向して、レニン、マルクス糞喰へ。
シテ、ツレ〽レニン、マルクス糞喰へ……
（ワキ　登　場）
ワキ「これは西の村辰五郎で御座る。大工左官のやうな名は持てども、これでも思想家、文學者のつもりで御座る。自然主義花やかなりし頃、小徑と申し小説なども書きまいたが、賴うだお方の婿がねにきまり、東雲堂と申すフミヤの經營

に當りまする頃より、專ら三十一文字を弄びまいたが、だあれも評判を立てても呉れず、腐りまいたが、金儲けには拔け目なく、只より安い稿料にて、かずかずの歌集を出版いたいて、しこたま儲けまいて御座る。なれごも、歌作りの名も惜しう御座れば、目先のかはつた行き方により、人氣を得ようと心がけ、「生活派」なごと新し氣のカンバンをかかげ、プロ短歌をはじめまいたところ、一時は相當に人氣を博したやうで御座れご、直ぐに飽かれて、轉向者續出、詩に解消なごの議論も出まいて、トントこの頃はちちも御座らぬ。」

シテ「これは西の村の辰五郎と見申いた。和御領は何となされた。」

ワキ「テンと出來ませぬ。」

シテ「さては、和御領も轉向でおりやるか。」

ワキ「なかなか。この頃は宗教家になりまいた。修養論も書きまする。」

シテ「修養論！　ホウ、プロは宗教否定とききまいたが。」

ワキ「なかなか。それがしは元よりプロではおじやらぬ。歌だけがプロで御座つた。社長といふ肩書がつきまいては、仮面も被れませぬ。」

シテ「何の宗教で御座る？」

ワキ「ただいまは、「生家の家」で御座る。「ひとのみち」にも居りまいたが、只今は「生長の家」で御座る。これがその「生長の家」から出まする『山鳩』で御座る。」

シテ「ホウ……レニン、マルクス糞喰へでおりやるな。」

シテ、ツレ、ワキ〻レニン、マルクス糞喰へ、レニン、マルクス糞喰へ。

（みなみな歌ひながら退場）　（昭和十二年）

無事なわけ

大阪の『アララギ』會員、高安やす子は、『明星』にゐたのが、『アララギ』に轉じたのである。やす子が有名な病院長夫人で、大阪社交界の花形である處に目をつけて、「奥樣、奥樣」と取卷連の某が、彼の歌集『内に聽く』の序文にケチをつけ、とうごう『アララギ』へ引張り込んだといふ噂であつた。

そして、一年生からやり直したといふので、『アララギ』では珍重がられてゐるわけだが、アの才と熱（勿論騒ぎ立てる程でもなささうだが）財力、容姿（これもこの頃は昔の面影もないが）を圓滿具足してゐながら、杉浦翠子の『彼の女を破門せよ』にも、『かなしき歌人の群』の中にもあらはれて來ないのは、さすがに大阪に住んでゐて、東京にゐないからに相違ない。

大阪では、社交界の中心花形で、兎角の噂をまきながらも、『アララギ』の末流

を潤してゐるわけである。

と見えるのは、世界が違ふので、社交界での行狀記が我等に傳はらないのかも知れない。またイサコサをつくり出す元氣な歌ヨミが大阪にはゐないのかも知れない。また貧乏たれ計りで對手にされる樣なのがゐないのかも知れない。（昭和十一年）

テンプラ會員

大日本歌人協會では、第二次會員を發表した。顏ぶれを見ると、イカガハシイ奴さんの名も相當にあるが、いづれも名譽と心得てゐる人ばかりだから、精々澤山に收容してやるがよからう。

ところが、前會員であつて、なほ第一次、第二次と詮衡に漏れてゐる連中は、まづテンプラ會員であつたのである。お氣の毒だがメッキが剝げたのだ。

ああ、かなしいかな。（昭和十二年）

歌壇今昔僞名變名匿名改名番附

昔

横綱	小松原春子	窪田空穗
大關	柿の村人	久保田俊彥
關脇	木下杢太郎	太田正雄
小結	都會詩人	矢代東村
前頭	赤木桁平	池崎忠孝
前頭	名告藻女	小口道子
同	潮みどり	長谷川桐子
同	田中靜潮	對馬完治
同	三ケ島葭子	生田花世
同	江原小徑	西村陽吉
同	日夏八郎	藤居敎惠

蒙御免

檢査役 柳田新太郎　尾崎孝子
大橋松平　本美鐵三

今

横綱	釋迢空	折口信夫
大關	狹山信乃	前田繁子
關脇	四賀光子	太田光子
小結	水町京子	宮阪みち
前頭	泉幸吉	住友吉左エ門
前頭	逗子八郎	井上司郎
同	川上小夜子	小西慶子
同	北見志保子	濱あさ子
同	庵原憲	武田全
同	岡本文彌	井上猛一
同	丹草二	二十二鐵玄

司行　退屈堂主人

元勸進　歌壇風聞記

（昭和十二年）

議長さん

名古屋ウタヨミ仲間では、今『議長』といふ言葉が流行してゐる。これは小田原評定位の議長だとおもつたら大間違ひ、ごうも衆議院議長を意味してゐるらしいので、サア大變である。

手品にも仕掛があり、化物にも頭はある。いはんやゴシップにもネタはある。正体は見たり枯尾花で、きいて見たらナナーンダ位のことである。

一夕、名古屋の某、遠來のウタヨミと共に晩餐の席へ招いた一老妓があつた。これはまだ老妓といつては可愛相な年輩ではあるが、名古屋の不良歌人の仲間にチヨイチヨイ顔馴染のある極めてひようきんな女でその老妓の口から

『三田サンが議長にナリヤーシタナモ』

といつたのであつた。驚いたのは、名古屋の某、遠來のウタヨミばかりではなく、その席に居合せた女將まで吹き出したのであつた。「三田サンが議長にナリヤーシタナモ」といふには、これに相當言葉を差加へて云はねばならないのを、せつかちとひやうきんとを以て知られてゐる老妓はウツカリかう放送したのであるから話は面白くなつてくるのであつた。

其夜某は、その二次會に於て不取敢この老妓にも議長の命名式を擧行したといふことであるが、この話をソレからソレへと宣傳につとめてゐる某も、流石に毒舌家らしく熱心なもので、その物好きにも呆れざるを得ないが、何事にも一理屈いひたさうな顔をしながらもこの話をきいたら、流石の澪人もさぞかしよろこんでゐるであらうといふ評判である。（昭和十二年）

名古屋の誇り

名古屋の持つ歌壇的誇りといつて、お國自慢の話題にならぬこともない。

歌集『獨り歌へる』が最近牧水信者に異常にもてはやされてゐるが、名古屋ではこんなものは決して珍品でも何でもない、二、三の古本屋の煽り方一つでごうにでも理屈はつく。流石に發行地元の名古屋では、アソコ、ココと指を屈すれば相當にある。持つてゐさうで持つてゐないのが發行當時の世話人鷲野飛燕で、こんな例はいくらもあるが、皮肉といへばいささか皮肉である。

但しこの『獨り歌へる』の原稿が保存されてゐるが、一部分であつて全部ではない。

次ぎにこれはまた國寶的存在、與謝野晶子の『みだれ髪』の原稿が全部名古屋に

保存されてゐる。

其他、晶子の伊太利亞で出した歌集などは恐らく天下一品といつてもいい、これ等はともかくも名古屋が持つ歌壇的の誇りである。（昭和十二年）

雲隱後白浪（かだんらくごしやごうなつた）

一時は花やかな存在であつた歌壇人の何人かは、疲れて、行き詰つて、そのまま消息を絶つて了つたり、經濟的に有利な他の藝術部門へ巧に走つて、ホンの手慰みだけに歌を見せたり、見せなかつたり、全然行方不明になつたのなど、——

佐藤春夫　『明星』の末期から、『スバル』にかけて、詩と歌とを見せてゐたが、散文詩から、小說家になつて了つた。同じ仲間に、

堀口大學　がある。全權大使堀口九萬一の伜で、いまは飜譯物の第一人者。それでも本年は歌集『涙の念珠』が出てゐる。

阿部肖三　も同じ仲間だが、水上瀧太郎と號して、小說を書いてゐるのを見たことがある。實業家の息子で、今ではごこかの會社の社長か專務をやつてゐる筈。

太田正雄　一名木下杢太郎、もまた『明星』に屬して、歌もあつたやうに思ふが、『スバル』ではもう劇作を主にして了つてゐた。詩は時に見せるやうだが、歌は全然見せなくなつて了つた。醫學博士。

高村光太郎　碎雨もまた、詩と歌とを以て知られてゐた。今は彫刻家として、父高村光雲のよき後繼者である。

有本芳水　柴舟の車前草社のメンバー。夕暮、牧水と並べられてゐた。早稻田を出てから、實業之日本社に入り、少年雜誌を編輯するやうになつて、詩から童謠の方へ行つて、歌もあるかも知れないが、少年讀者の御相手程度のもので、歌壇外の存在でしかない。

三木露風　も同じく車前草社だが、早く詩の方で知られ、一時は白秋、露風といふ時代もつくつたが、夕暮、牧水に押されて、完全に歌壇から絶緣されて了つた。近頃三四流の雜誌に歌を時折見せてはゐるやうであるが、もとより歌壇人として取扱はれるべきものではない。同じことを謂ひ得る人に、

正富汪洋　がある、詩人としても露風の域に達せずに了つた。

川路柳虹　にも歌を詠んだ時代があつたが、今はうたのうの字も言はない、美術學校洋畫科出、その本職の洋畫よりも詩で知られてゐた時代もあつたが、美術批評家、映畫批評家、ダンス批評家といふ風に、ダンダン横道へ外れて行つて了つた。

國枝史郎　も歌を詠んだ時代があるが、早く劇作の方へ行き、大衆小說家とし

て相當花やかに見られた時期も持つてゐるが、目下はダンスの教師にナリ上つたといふか、ナリ下つたといふか、教習所を持つてやつてゐるといふ事である。

水守亀之助　にも夕雨と稱して歌を詠んだ時代があるが、もう三十年も昔の夢のやうなはなしになつて了つた。世間では小說家としてより知られてゐないやうである。

尾崎楓水　も國學院卒業前後はかなり歌をつくつてゐたやうである。小木曾旭晃の『地方文藝史』では神樣扱ひに近い扱ひ方をせられてゐるが、今では江戸文學研究、軟派の研究で「歌を詠んだ時代もあつた相な」と、他人のことのやうに考へてゐる存在である。

百田楓花　本名宗治、大阪にゐるころ歌の雜誌を出してゐたこともあるが、その後詩專門となり、童謠が流行しはじめてから、完全な童謠作家、童謠の先生になつて了つた。

原田實　は薫園の「短歌研究會」に屬し、暢谷と號してゐた。牧水が『創作』を創刊するに當つて、それに馳せ參じたが、早稻田を出ると、教育學者になつて了つた。薫園の門下の同期に、

近藤元　がある。これも『創作』に富田碎花と同時に參したが、後相場をやつて儲けたとか、損をしたとか、いふ樣な評判もあつたが、その後の消息は傳つてゐない。

細谷明　樗標もまた、薫園の門下、行衞不明の一人だが、その頃は市役所へつとめてゐた。

岡村憲三　夕霧もまた、同じ薫園の門下だが、東洋大學在學中に文檢を取得、卒業後どこかへ就職して、ブツツリ消息を歌壇に絶つてゐたが、先頃フとした機會に「職員錄」の中で發見した。山口縣宇部中學校長。

新井勘司　『創作』に助手として參與して、近藤元などと、賤業婦などを題材にしてよろこんでゐたが、『創作』が東雲堂の手を離れた頃から行衞不明になつて了つた。『東日』から、觀光協會に轉じた新井莞爾が、この新井勘司と同一人だとやら、ないとやら、謂はれてゐるが、確かでない。

尾張穗草　『水甕』の前身、『車前草』の一員で、『車前草』癈刊後、岩谷莫哀と共に『櫻草』を出し、後、『現代短歌』と改めたりしてゐたが、東亞堂の『青年文壇』『才媛文壇』などを編輯してゐた頃から、歌を見せなくなつて了つた。現在講談社の『現代』の編輯をやつてゐる。

松原至大　舊姓村山も、尾張と殆んど同じ頃に歌から詩に專念してゐたが、「早稻田」を出て『東日』に入り現在は『小學生新聞』を編輯してゐる。童謠、少年少女を取扱ふ詩人として知られてゐる相である。

奥川夢郎　も亦、松原と同じく『車前草』と共に終始した樣であるが、歌集に『小鳥』がある。袖珍版のささやかなものであるが、齋藤茂吉がそれを見て、

「僕も早く歌集が出したいナア。」

と言つたといふ事も、有名……ではないが、事實である。奥川はその後劇へ入つて行つたが、あまり榮えないで了つた。現在は赤十字社とかで、おとなしくサラリーを貰つてゐるといふ事である。

野口征夫　にも歌はあつた筈だが、今は記憶にない。野口は早稻田の英文科を出て、生命保險會社へ入り、美術評論をやり、繪を描いたといふ、おそろしく多角形な徑路を辿つて、今は、クラブとか、レートとかの廣告圖案をやつてゐる相である。彼の自慢は「タゴールをはじめて日本に紹介したものは僕だ」と言つてゐる。

岡田鯨洋　名は道一、元は十月會の同人だが、同時に『心の花』にも薫園系統にも歌を出してゐたといふ、浮氣つぽい存在である。

「四谷には、僕の家内がゐるので、町が明るい」

といふ風の歌を發表して、歌壇をダアといはせたチョコレート歌人なんである。

醫博で學校衞生學者として知られてゐる相である。

宗野誠月　本名誠、懸賞作家で、『秀才文壇』をはじめ讀者文藝欄を賑してゐた。今は醫博で川柳の宗匠だ相だが、懸賞では時々選者の處に名が出たりもしてゐる兩刀づかひ。同じく三十年來懸賞はかりで樂しんでゐるものに、仙台の、

尾形紫水　がゐる。前田夕暮、若山牧水の名の出てゐる『新聲』以來の投書家懸賞家で、小品文、和歌、俳句、都々逸、何でもゴザレの技用人である。もういいお爺さんの筈だが、相不變、『講談倶樂部』や『講談世界』で當選したりしなかつたりしてゐる。

小澤紫絃　嘉一郎も亦、尾形流で、これはまた女名前、男名前を從横無盡に使ひまくつて、あらゆる大衆雜誌の「讀者文藝欄」を賑はせてゐる。千葉縣佐原町といふ住所がついてゐれば、大低彼の匿名、僞名、變名であるときめて間違ひはなからうといふことである。この二人は、今でも歌も出してゐるが、歌壇生き殘りの古武者といふわけに行かないこと勿論であらう。

出隆　最近文博を獲得した哲學者だが、死んだ『水甕』の石井直三郎と四高で同窓だつた關係から、『水甕』の初期に關係して居り、何らかの變名で歌作もあつた筈である。

谷川徹三　も亦哲學者であり、敎育學者であり、文學者でもあり、近頃「文藝學」とか何とか云ひ出した。出と同じ頃『水甕』にも關係してゐたやうに思ふが、歌人としての存在は、出と共に水平線以上に出てゐたとは謂へない。

赤木桁平　も同樣である。赤木は最近文部參與官として、元氣のいい處を見せ

てゐる池崎忠孝のことである。そのホヤホヤの學士時代に『時事』へ書いた『遊蕩文學掃蕩論』は有名である。

重田春子　といふ名を歌壇で知つてゐる者は、頭が半分以上禿げて了つたり、新聞紙を二尺近くも目から離してでなければ讀み得ない人々でなければならない。正富汪洋の小説『明眸』の中で、

「星が見えます。義男さん。」

と言つてゐるのが、それであるといふ事だが、確にはわからん。その眞僞が確めたければ、前田夕暮にでも聞いて見たまへ。

長司春湖　名は鐵三『明星』黨であるが、牧水の『創作』にも創刊當時はゐたやうな記憶がある。その後更に歌を見せぬ、先年『明治大正歌書解題』といふ書物を出した本美鐵三が、この長司だといふ評判であるが眞僞のほゞ判明しない。たしか彼は名古屋近在にゐる筈だから、名古屋のタウヨミが來たら、聞いて置いても何かの用に立つかも知れない。

藤岡玉骨　奈良縣の生れ。これも『明星』である、明治末期にはかなり多方面の雜誌に歌を見せてゐた。今はときめく熊本縣知事。歌なんかに浮身をやつすお暇がなからう。弟も、妹も『明星』を流れを汲んだ歌よみである。

水野葉舟　元蝶郎と云つてゐたヤサ男である。『明星』に屬し小説も書いた。

自然主義花やかなりし頃だ。葉舟になつてからは歌はあまり見せてゐないやうである。確か日本銀行かの銀行員で、いつも白足袋の着ながしで、シヤナリシヤナリと練り廻つてゐた。その頃男の白足袋は可なりニヤケて、キザに見えたものである。

秋庭露花　『新聲』『秀才文壇』の投書家出身で、『明星』にもゐたことがある。文章、詩歌ナンでも來いの達筆家、飜譯もあつたやうに思ふ。彼氏に就いては剽竊を云云された事が、妙に筆者のアタマにのこつてゐる。

剽竊と云へば、いま鼻イキ荒く、現役で活躍してゐる諸君の中にも二三ゐるやうだが、此頃は時效といふこととして置かう。

中川一政　洋畫家として一流に列してゐる。中學卒業前後に『創作』に作品を發表、前途を囑望されたが、間もなく畫家として認められたので、それ一方になつて了つた。近頃時々作品を綜合誌上に見せる事がある。

江南文三　『明星』から『スバル』時代には慥かに闘士の一人、近來『冬柏』に譯詩をたまたま見せてゐるの外、鳴かず飛ばす。東京府一中の先生で納つてゐる

長嶋豐太郎　これもイニシヘ組の一人。古典全集で當てたとやら、儲けたとやら、現在でも引つゞき出てゐるそうだが、昭和二年設立の株式會社日本古典全集刊行會について、專務取締役關戸信次とお二人に質問したい事がある。

坂梨葉村　近頃一寸歌壇の話から遠ざかつてゐるが、例の川上泥舟がそのナレ

の果てだ。『新聲』『中央公論』で牧水や夕暮とトツブ爭ひをやつてゐる頃は、キリツとした兵隊さんであつた。

青山清華　近藤嵐翠なぞと共に、グニ華やかな存在であつたが。清華はその後杏として消息をきかず、嵐翠は後、西田姓を名乘り、九州アタリのささやかな歌會に出席したといふ消息を時々聞くこともあるが、歌壇人としての交渉を自ら避けてゐるやうでもある。これらが、そのままグングンと伸びてゐたら、牧水夕暮の地位をぐう變化させたかも知れない。或はクレオパトラの鼻が一寸低かつたらといふのと同樣に、明治晩年から大正昭和の歌壇史を、現在のやうにはさせなかつたかも知れない。（昭和十二年）

商賣の方が道樂

川田順は江戸ッ兒で、故川田甕江の伜であることは有名であるが、長い間住友の番頭をつとめ、その重役にまでなり上つただけあつた、スッカリ大阪商人になり切つてゐた。

自分では、「法律はメシの爲にやつた學問で、文學は心からの事業だ、こちらが本職で、住友番頭は道樂だ」と云ひ云ひしてゐたさうだが、ごうしてごうして、その使ひ分けは心得たもので、この点死んだ中村憲吉をして感嘆これを久しくせしめたといふ話である。

憲吉が『大毎』の經濟記者をしてゐた頃、今橋の住友總本店へ川田をたづねると、必ず先づ

「今日は新聞記者として來たのか、歌よみとして來たのか。」

と聞いた相だ、そして、

「新聞記者としてなら會へないが、歌人としてならユックリ遊んで行きたまへ」

といふ頗るハッキリとした應接ぶりで、カケ出しの經濟記者は手も足も出なかつたといふ。

そして、ふつと何かのはづみで、事いやしくも歌談の範圍を越え、經濟問題や、住友の事業關係に、一寸でも觸れたが最後、忽ちにして、今までのしみじみとした話しぶりは改り、居ずまひを直し、顏色までコワばらせて、取りつくシマもなく、スコブル素然として了ふのが常だつた相である。（昭和九年）

うらおもて

平社員時代には、支配人や重役の惡口をいふ大先達でも、一朝、課長か主任にで

もなつたら、決して支配人や重役の悪口をいふものでは無い。
歌壇でもこれと同じ樣に、歌人協會員たらざる以前は、悪口雜言をいつてゐた連中も、一度、歌人協會員に納るや、昔の悪口は何處へやら、もうスツカリ鳴りをしづめて、涼しい顔の協會禮讃。とは笑はしやアがる。
これが名古屋地方できいた、お出入の八百屋の話。（昭和十二年）

會計報告

正確と詳細であるべきは、會計報告をなすべきものの、最も注意すべきことである。いくら立派な數字ばかり並べても、それが不正でなくとも、出鱈目であつたりしてはならぬ筈だ。勿論内容的には知る筈もないので、それが不正であるとか、出鱈目であるとかいふのではないが、最近二つの會の會計報告を、しかも同一の歌の雜誌によつて見た。

事業は二つとも當時流行の歌碑の建設、よくいへば亡き師のため、悪くいつたら、他人から金を集めての自己宣傳の場合もある。

一つは收入の部に於て最も詳細を極め、支出の部に於ては、たつた二行のみで至極アッサリと片付けてある。恐らくこの位常識を逸した會計報告は天下一品である。自分達の出したと稱する金額のみを麗々しく揚げ、支出の部を、タツタ二行、即ち合計金額のみが表示されてゐる。いひかへればこんな人を馬鹿にした會計報告はあまり見たことが無い、これは一雜誌上の報告であつて、他に詳細なる報告が別にそれぞれ出資者に出してあるとしても、いやしくも誌上の公開である以上、自分達の出したと稱する金を麗々しく揚げた以上、ナゼ支出の部に於ても詳細に近い發表をせぬか、理屈はともかく、常識の上から考へてもこんなことの判斷がつかぬとは、よほど頭のどうかしてゐる人間共である。

もう一つは、收入の部を合計金額で表示して、支出の部に最も詳細を極めてゐる。この方がどれ丈常識的であるかわからぬ、少くともコレ見よがしに、自分達の出したと稱する金の報告書の如き會計報告に比べたら、とても愉快に拜見することが出來た。

前者はその内容も滿更知らぬことはないので、よく考へて見れば、彼等としてはヤリさうなこととも思はれるが、虚勢、虚名に餘念のない連中だから、こんな一會計報告にまでこれを利用して、平然とソリクリ返つてゐるとは、ヤレヤレとおもはざるを得ないではないか。（昭和十二年）

綽名競（あだなくらべ）いろは歌留多（かるた）

――御當人を明示しない方が愛嬌でしよう――

イ　イヤなぎたの新太郎
ロ　露路裏の御曹子
ハ　芭蕉くづれの水ッポ爺
ニ
ホ　房總半島の若年寄
ヘ　へら鷺の片足男
ト　ドヤ文のベランメイ
チ　千葉縣平民の江戸ッ兒
リ
ヌ
ル
ヲ　荻窪の豆狸
ワ　吾妹子のチョビ介

カ　葛飾の山庄太夫
ヨ
タ
レ
ソ　ソレみたかの編輯長
ツ　つけ捨てし野火の宿禰
ネ
ナ　泣き笑ひのセミマロ
ラ
ム　ムシヤシ坊のかげ辨慶
ウ
ヰ
ノ　のほほんのチヤッカリ和尚
オ　おざきまつくらの女社長
ク　喰ひ下りのダニ先生
ヤ　ヤジンマのカンイチ
マ

ケ
フ　こたびの大人（うし）
コ　エチオピアの男爵
エ　テンプラのはやかはり
テ　赤へこのバルチザン
ア　サイトウの野人ドクトル
サ　砧村の木兎爺
キ
ユ
メ　メフイストフエレスの法律顧問
ミ　亂れ髪の駿河屋娘
シ　澁谷田圃の直侍
エ
ヒ
モ
セ　千本濱の四十後家
ス

畢

（缺けたところは讀者諸君でご隨意に書き添へて下さい）（昭和十二年）

續歌壇風聞記　近刊

昭和十二年十月二日印刷昭和十二年十月六日發行　著作兼發行者名古屋市南區鶴本町一三八番地石黒房次郎印刷者名古屋市中區矢場町一ノ切一六番地志田榮次郎印刷所名古屋市中區矢場町一ノ切一六番地志田集榮社發行所名古屋市西區本塚町三八番地ノ二歌壇風聞記社

定價金五拾錢

發賣所　名古屋市西區本塚町　名古屋書房　振替名古屋二三六〇九番

發賣所　東京市麹町區九段下　株式會社東京堂　振替東京二七〇番

終